

---

# 東方娛樂記

らららら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方娯楽記

### 【Nコード】

N6837Y

### 【作者名】

らららら

### 【あらすじ】

幻想郷に幻想入りしてしまった嘘つきの少年が、変てこな能力手にしてフラグ建てまくりながら生きていくお話。外で死を望んだ少年は幻想郷でどのように生きていくのか。嘘が真に変わり、真が嘘に変わる。舌先三寸で俺は生きていく。

一話 嘔吐きの幻想入り（前書き）

隙間妖怪&脇巫女&才り主

## 一話 嘔吐きの幻想入り

世界には埃のように嘔が満ち溢れ、海のように世界を囲んで  
いる。

幸せなど感じない嘔吐き。

嘔を吐くなど愚の骨頂。

けれど人は嘔を吐く。

至高だという錯覚をもってして 下痢のような嘔を吐く。

ここから始まるのはとある嘔吐き少年のお話だ。

何もかもを棒に振るう、のらりくらりな少年のお話だ。  
自分自身を騙し始めた、呪いの掛かった少年のお話だ。  
世界全てに顔を背けた、幸せを感じない少年のお話だ。  
人生の一生を破壊した、全てを無にする少年のお話だ。

とある、嘔吐きの少年。

幻想郷に、堕ちる。

「……ああ、すみません、説明長すぎてほとんど聞いてませんでした」

「……三時間もの間説明をしていた私の苦勞はどうなるのかしら？」

「得意の隙間にも埋めてみればいいんじゃないですかね？」

軽口を叩きながら、目の前に置かれたマグカップを取り中に入っていたお茶を啜る。渋くて美味かった。いやお茶の味なんて知らないけど。知ってるのは結構久しぶりのお茶を飲んだっただけだけど。

「……ああもう、調子が狂うわ」

「じゃあ簡潔に俺がどうなったか教えてください」

「貴方は死を望んだ。だから私がここに連れてきた。ここは幻想郷。人と化け物が共存している。貴方は人としてここに来た。今貴方は博霊神社に居るっ！ どうよ！ 簡潔でしょ！ ちなみに私は幻想郷の管理人なのよ！」

「はい最後以外は簡潔でしたね。ありがとうございます」

悔しそくに顔を歪める化け物……とは思えないほど可愛いというより魅力的な女性。一時間前までは妖艶に微笑んでいたのに、どうしてこんなにも変わってしまったのか。俺には理解出来ない！

「貴方のせいよ！」「心読むな」

とはいえ、そうか。確かに俺は死にたかったけれど、まさか生かされるとは思っていなかった。正直言っただ迷惑極まりない。と思っただけれど、話を聞く限りだここは俺みたいな捻くれ者の天邪鬼でも普通に住める場所らしい。

しかし実際にここで生活するかは知らないけど。

「話聞いてたんじゃないの!」「心を読むな! 次読んだら二度と喋らねえからな!」

おつと声が荒んだ。人をからかう時には決して素を見せちゃ駄目っていうのは教わったはずなんだけどなあ。何て思っただら睨まれた。成る程これも中々ありか。って何危ない思考してんだよ俺。

「……貴方本当に十六歳?」

「ところで貴方は何さ」「言いきったら死にそうな気がした。というより殺されそうな気がした。やはり女性に歳など聞くべきではないか。」

いや、でも確かこの場所が出来たのが 逆算してみた。驚いた。思わず仰け反った。隙間妖怪でありこの管理人でもある目の前の紫さんでさえ、その反応に溜息を吐いていた。はっはっは、笑えちやう。

……笑った瞬間に殺気飛ばされるってどうゆう事だよ。誰か説明しておくれよ。なあ殺気飛ばした張本人である紫さんよ、答えておくれよ。

「そうね、人をおちよくりすぎだから」

「はい読んだね今心読んだね！ ごめんなさいって言うまで喋らねえかんね！」

「……………」  
「ごめんなさい」「その表情グツジョブです！」「うううううううう！」

何かもの凄く悔しそうな表情で唸っているのは無視する。金髪美女があそこまで可愛い表情見せてくれたんだからラッキーラッキー。例え嫌われようとも俺はめげない事にする。

「……………」別に嫌っちゃいないんだけどね」「うーん、今の独り言見逃してやる」

おつと顔赤くなった。これはシャッターチャンス、だが残念カメラがない！ 畜生俺の馬鹿野郎。……………しかし中々、こんな管理人が居る位の所なんだから、俺が居ても遜色は無いだらう。

永住しちまうかな。とか甘い事を考えてみる。だが実際甘くも無い。能力も無いし力も無いけれど 人里とか言うところなら俺は暮らしていけるだらう。

だけどそれはつまらない。そんな安全など望んじやいない。俺にとつて、安全とは逃げるって事と同じだ。それは嫌だ。それは死んだ方がマシ。安全とかならあの世界に居ても変わらないんだ。それなら死ぬ可能性があろうとも、危険を望みたい。

危ない思考だと、自分でも分かっている。紫さんは何も言わない何も言わないで、静かに茶を啜った。空気が読めるんだらう。成る程、気を抜いたら惚れちゃいそうだ。いやもう惚れてる。

「話は終わった？」

襖の開く音と同時に聞こえた背後からの声に、思わず振り向きそうになる。確か声の主はこの巫女である博麗霊夢さんだったはずだ。俺の記憶力に間違いがなければ、そのはず。

「ええ、大分纏まったわよ」

「そう、なら良かった」

どこが纏まったのか……いや一応纏めてくれたか。俺が理解していないという選択肢はないようで、どうやら随分最初に言われた気がする『理解しないと駄目だからね』という言葉は本当だったらしい。危うく駄目になる所だった。

再びマグカップを手に取り、茶を啜った。和室にあった畳の香りと共に茶の香りが漂ってくる。いや茶の事なんてしらないけどね。

「お茶菓子あるけど食べる？」

「貰うわ」「遠慮しておきます」

「……紫、ちょっと遠慮っていう言葉を覚えた方良いわよ？」

「っ、うるさいわね！ いいじゃない別に！」

そんな紫さんの口調に、思わず驚いた顔を見せる霊夢さんが居た。おーい、紫さんや、口調が完全に狂ってますよ。あの妖艶な感じの紫さんはどこに行ったんだい。

思った瞬間、紫さんは開いた扇子を口元に持っていった。

「……相当崩されたようね、紫」



「ちょっと落ち着きを無くしただけですわ」

そう言って目元だけで妖しく笑い、誘い込むような視線を浴びせてきた為、ちよつとばかり心が揺れた。成る程やはり、美女のその表情は男の理性を崩しにかかるようだ。崩れるような俺じゃないけど。

と　　いうよりも、さてはて、どうしたものか。とりあえず面白そうな人達がいっぱい居る場所つてのは分かったし、じゃあここに住んじゃおうつて思ってる俺が居るのも把握している。

が、どこに住む。人里には住みたくない。お断りだ。人里つて所に行ったらもう二度と旅というかそんな感じの事は出来ないらしい……妖怪を倒せる能力があればオーケーらしいが。

……霊力やら魔力やら人間が持てる力は俺に無いらしい。それは巫女さんに言われた。霊夢さんに最初聞いたら諦めなさいってバツサリ切られた。

じゃあ、諦めるか？　まさか、笑える。諦めるなんてそんな事をするつもりはない。

「　　紫さん、能力を知りたいんですけど」

「　　あら、能力持ちの外来人なんてそうそう生まれないわよ？」

「　　知ってます　　そんな事は知ってますとも」

「……そう、ね。貴方みたいな方が安全に人里で暮らしていたら、私としても貴方としてもつまらないわよねえ」

言つて、扇子の中の表情が笑つたのが分かった。それはもう魅力

的に。

だから、魅せるように笑ってやった。

「霊夢、この方を死なない程度まで痛めつけてくれる?」「は?」「え?」

「おい紫さん。僕は貴方を怒らせたかなー。おい。何ソレ、どんな虐めだよ。泣いちゃうぜ俺。」

「死にそうになった時に能力が発現する　楽しみだと思わない?」

そして　また妖艶に笑う紫さんでした。

突如背後に受けた凄まじい一撃で、この日何度目か分からないが天地が反転、肩から地面に落ちそのまま五、六回バウンドし、止まる。が、視界にハンドボール級の球が見えた瞬間、自分の意思で体を横に投げ出した。風を切るような音と威圧を出しながら、その球は地面に弾ける。

起き上がると同時に、空中に居る霊夢さんを囲うように周っている。足の筋肉は悲鳴を上げ、捻った足首はずきずきと痛みだし、呼吸をする毎に砂が肺に紛れ込む。正に　地獄。一切合財抵抗の出来ない俺は、こうして逃げる事しか出来ない。

「ギブアップって言えば終わるのよー」

空中からの声。ギブアップなんて出来る訳がない。そう思っていると、目の前に弾。これは避けられない。腕をクロスし弾を受ける。慣れない衝撃に体は吹き飛び、両足は地面から浮く。輝く太陽を視界に入れた瞬間、背中から地面に落ち頭を強打してしまう。まず

った。  
何とか、何とか頭に着弾しないようにしてきたというのに。地面に強打してしまえば終わりじゃないか。

「あら　頭打ったみたいね。もう終わりでいいんじゃない？　疲れたし」

そんな声が聞こえた。なめやがって　なめやがってッ！

くらくらする頭を持ち上げ、頭を振る。後一回でも頭を強打すれば　死ぬかもしれない。が、それがどうした。それが　何だというのだ。俺は元々死を望んでいた。それを生かされ、生きる事にした。だからここで死んだとしても　俺は別に後悔も反省もしなくていい。

さあて　足掻かせる。

「なめてんじゃねえよ　糞巫女が」

言った　瞬間、目の前が真っ白になった。同時に正面から衝撃を受け、けれど今度は前みたいな生半可なものじゃなく　気が付いたら仰向けになっていた。何が起きたのか理解できない。立ち上がろうとして　何が起ころうか確認しようとして　体が動かない事に気が付いた。

そして数秒経ち、全身がもやもやとしているのに気がつく。全身が胸焼けしているような錯覚。次の瞬間　俺は血を吐いた。これまで十六年間生きてきて、俺は初めて血を吐いた。仰向けの状態で

血など吐けるのか　これは、きつつい。早く起き上がらないと俺は血を飲み込んでしまう。それは危険だ。死ぬかもしれない。

死ぬかも　知れない？

ああ　結局俺はここで生きたいって事か。結局、俺の心はここを望んでいるって訳か。なら　いい。もう　いい。

この世界で楽しく生きる為　俺はここで倒れる訳にはいかない。人に眠る潜在能力という名の能力は　まだこの程度じゃ開花してくれない。

「限界を　決めるな。進化に　壁を造るな」

呟く。

「自分を　否定するな。夢から　逃げるな」

呟く。

「男なら　」

呟く。

「　諦めてんじゃねえッ！」

そして　ゆっくりとした動作で、俺は体を起こす。目を見開く。霊夢さんと、縁側で意地悪く笑った紫さんが見えた。次の体を立たせて、俺は自然の動作で右手を突き出す。

変化させる。

「『変化させる程度の能力』　ね」

紫さんが呟いた。成る程。そうか。

霊夢さんの足を木の棒に　変化させる。

「……………何も起きないわよ？」

朦朧とした意識でそんな言葉が聞こえた。おいおい勘弁してくれ人には作用しないのか？

けれどまだ倒れない。空中でふわふわしていた霊夢さんが地面に降りてくる。もう弾を撃つ気はないらしい。

　　霊夢さんの周りの空気を、強烈な睡眠毒に。

「……………？　何も起きないわよ？」

……………。

……………それは、アンタが規格外だからですよ、霊夢さん。

口は開けなかった。声帯も動かなかった。薄れゆく意識のなか  
　　霊夢さんがかくんとふらつくのが見えただけ　満足だった。

「あ……………眠い」

一話 白黒感情（前書き）

魔理沙さん登場回。わーパチパチ。

## 二話 白黒感情

驚く程すつきりと意識が覚めたなあなんて思いながら目を開けると、知らない人がこつちを見てた。……あれ、メイドさん？ その手に持った筭は……何だろ？ つか帽子が尖ってやがる。

何か 魔法使いみたいなの、印象だ。いやしかしここには魔法使いも居るんだけっか？ んじゃあこの人魔法使いなのか？ 分からん。

「……そんなに見つめられると照れるんだぜ」

「こりゃ失礼」

とりあえず視線を外して、起き上がろうと試みてみた。けどノーパワー。霊夢さんにフルボッコされて起き上がる力も失ったよう……。ああ、そうだ。何か変な能力あるんだった。

だから体を普通の状態に変えようとしてみたが 出来ない。霊夢さんに使用できなかったからもしかやと思っていたが、成る程つまり人体には使用出来ないのか。

「あの」

「ん？」

「名前お聞きしても宜しいですか？」

「ああいいぜ、自己紹介がまだだったな。霧雨魔理沙っていうんだ！ よろしくな！」

霧雨魔理沙……魔理沙さんか。黒と白が基調の……俗に言うメイド服を着こなして、これまた黒白のトンがり帽子、腰くらいまである長い金髪。オーケー覚えた。

「お前は何て言うんだ？ 私だけ自己紹介してお前はしないっていうのは何か居心地悪い」

「あー………そういえば紫さんと霊夢さんにも自己紹介してなかったな」

「………変な奴だぜ」

「まったくです」

そう言うと魔理沙さんはくつと笑って、立ち上がる。ふわりと金髪がなびいた。紫さんとは違う意味で魅力的だ。これまた惚れそうだ。これで惚れたら三人に惚れた事になるから止めてほしい。どうしてこの人達はこうも魅力的なのか俺には理解できん。

「霊夢と紫連れてくるぜ」

「いつてらっさい」

………そういえば霊夢さんあの後どうなったんだろ。象くらいなら軽く眠らせる量の睡眠薬だったのに、まるで気にしていなかった。不死身なんだろうか。………意外にありえそうで怖かった。

程なくして、目の前に空間が開く。いや、隙間と言った方が正しいか。おびただし量の眼球がその空間には埋め尽くされている。そっぴや怖がらなかつた外来人は俺が初だとか言ってた。怖いというより不気味なだけだな。



「起きたのね」

「一々隙間使わないで襖開けて入ってきてくださいよ」

そう言って襖を指差そうとしたが、力が一切入らなかった。非常にまずいような気がしてならない。これ二度と力が入りませんとか言われたら舌嚙んで自殺しよう。出来ないと思うからやっぱり泣こう。

そんな事思ってたなら静かに襖が開けられ、霊夢さんと魔理沙さんが入ってくる。

「ああやって入ってきてくださいよ」

「あら、そうすれば貴方を落せるかしら？」

「いやいやもう落されてますから安心してくださいよ。ちゃんと惚れましたから」

「そう言って惚れてる人は居ないのだけれどね」

「そうですかね」

とうかがまた紫さんの口調が最初と同じようになってる。まあこっちの方が合ってるといえば合ってるんだけど、せつかく崩したのにもつたいたい事をした。あ、でもこっちの方が良いって思ったのは俺か。ならいいや。

「で………良い雰囲気になってる所申し訳ないけど貴方の名前聞いてもいいわよね？」

呆れた表情で霊夢さんはそう言ってくる。ていうか何で霊夢さんの巫女服は露出が多いのだろうか。謎である。謎は謎のままが良いと聞くが俺としては謎は怖いんだけど。どうでもいいか。

ただ脇が見えるというのはまずい気がする。脇巫女と誰かに命名されてるんじゃないか。

「ちょっと、聞いてる?」

「ああはいはい、名前でしたね名前」

名前を言おうとして、言葉に詰まった。

……。

「名前、思い出せないんですけど」

「くっ。くくくっ……お前やっぱ変だぜ」

といいながら腹を抱えて笑い出す魔理沙さんと、何となく予想していたみたいな表情の二人。でも呆れが混じってますよー、呆れは隠すものでしょう。

はてさて……しかし、名前。何だっけか。そういえば名前を最後に名乗ったのはいつだったっけ? それすらも思い出す事が出来ない。そもそも俺に名前など有っただろうか? そういうものを一切与えられず、人として生きる事を止めさせられたから 俺は死を望んだんじゃないか?

「 すいません、ちょっと思い出したので一人にさせてくれませんかね」

吐きなれた嘘を、俺は吐いた。

……一体、どの位の間泣いたのだろうか。力を振り絞って布団にもぐり、声を押し殺し嗚咽を押し殺して泣いたのだから外に洩れては居ないだろう。今になって、どうして泣いたのかも分からなくなってくる。

ただ　この人達の優しさに触れて前の世界の事が溢れ出てきたのだというのは何となく分かる。本当に　この人達は規格外だ。見知らぬ人間にどうしてここまで優しく出来るんだろうか。見知らぬ人間にどうしてここまで気遣い出来るんだろうか。見知らぬ人間にどうしてここまで親切なんだろうか　お陰で泣かされた。

「ああ。起きるか」

そろそろ復活しないとなあ。目が赤くなってたら困るけど、まあそこはのらりくらりとかわそうかな。大分力の戻った腕で布団をばふっと押し上げた。

「ん、おはようませ」

「……いつから居た？」

「最初からだぜ」

襖の奥から見えるのは夕日だった。泣き出したのが昼だから、三

時間位泣いたり葛藤したりしてたのか。ていうか最初から居たって……紫さんの仕業だろう絶対。

「一人にしてくれって 言ったんだけどなあ」

諦めたように動ける手を使っておどけてみせる。魔理沙さんにはかっと思ろく笑って

「一人は寂しいんだぜ」

そう言ってみせた。魅せた。畜生良い笑顔だった。どうしてこうも 魅力的なんだよ。また涙が出そうになって、歯を食いしばって耐える。さすがにここで泣く訳にはいかないだろう。

プライドは、あるんだ。

「 どうも、ありがとうございます」

「 いやいって、今度盗ませてもらうから」

「 前言撤回してもいいですか？」

「 それは認めないぜ！」

認められないみたいだった。

「 さて、と。それじゃあそろそろ起きますかね」

「 おっ。三日ぶりの起床だな！」

「 ……今なんていいました？」

「三日ぶり」

「……そんなに寝てましたか俺？」

「ぐっすり眠ってたぜ！」

「何か悪戯されてませんよね？」

「ん？ 紫が朝お前の部屋から出てくる所なら見たけど？」

「……いや、さすがに、ありえないだろ、それは。何もされてないよな……」

「ちょっと不安だ。何かされてたら慰謝料払ってもらおう。」

「まっ、妖しい事はされてないんじゃないか？」

「……怪しいの間違いだと思いますけどね、いや、どっちでもいいのかな」

「難しいぜ」

「難しいですね」

軽口を叩きながら立ち上がり、膝から崩れそうになったのに驚きながら耐える。こんな体験は栄養失調で倒れたとき以来だ。両親に土下座して野菜を大量に貰ったのを思い出す。生人参は中々に美味かった気がするな。

こんな風に思えるって事は、どうやらもうここに慣れたみたいだ

った。俗にいう異常慣れとか現実逃避とかが関係しているんだろうか。

「肩、貸すぜ？」

「いやいいです、危うく襲いそうになっちゃうので」

「襲ったら殺すぜ」

「責任は取りますとも」

そう言ったら顔を紅潮させはじめる魔理沙さんが居た。いや、責任ってそういう意味じゃないからね、死ぬっていう責任の方だからね？ とは敢えて言わない。言ったら殺されそうな気が間違いない。

「行きますよ？」

「え……あ、ああ」

マジで誤解は止めてほしい。襖を開けると橙色の影が出来ていた。背後の夕日が原因なんだろう、幻想郷という名の通り、幻想的だった。フローリングなのか知らないがとりあえずそれっぽいや床の縁側を魔理沙さん先導で歩き、僕はついていく。途中魔理沙さんが振り返るのは足元のおぼつかない俺に対する気遣いか……情けない。

ある襖の前で魔理沙さんは止まる。開けて中に入ると夕食の準備をしていた霊夢さんが居た。得意なのだろうかと考えて、愚問なのだろう。

「魔理沙、丁度いいから手伝って。アンタは座ってて」

とてとてと走っていく魔理沙さんの後ろ姿を見ながら、胡坐をかいて座る。畳の香りが匂ってきた。何だか初めて嗅いだような気がするのは気のせいだと信じたい。

「……………霊夢さん」

「何？ 今忙しいから後にしてくれない？」

「一時の間でいいので ここに住ませてくれませんか？ 家事も出来ますし、言われたら何だってやるつもりです」

一切の感情を込めずに言ってみた。

「はあ……………あの隙間妖怪に住ませてあげてって頼まれたわよ。それを知った上で言ってるでしょ」

「予想した上でですけどね」

「まっ、変な事さえしなればその能力も有るし一生住ませてあげてもいいんだけど？」

「ありがたいんですけど、それじゃつまらないので」

「……………言うと思ってたわ」

「予想してましたね」

そうして博霊神社で生活する事が決まったのである。

二話 白黒感情（後書き）

なに後悔はしていないさ。更新は早めにするつもり。



### 三話 決意と嘘

ほら見る、こんな近くに星があるぜ！ 滅茶苦茶輝いてるぜ！  
あっはっはっ。

「何でこうなった」

「誘拐したんだぜ！」

「人はそれを拉致という」

魔理沙さんに誘拐　もとい拉致されました。そうです拉致され  
たんです。もうこれしか思う事がありません。幕に跨ってひいひい  
言いながら小柄な少女にしがみ付いている今の状態を、果たして前  
までの自分は許せるのだから……。

見る！　月が欠けてる！　これは異常事態だ！　三日月なだけで  
すけど。

「で……俺はこれからどこに行くんでしょうか？」

「魔法の森だぜ」

「どっして行くんですか？」

「ぞつよ……手伝いしてもらいたいんだぜっ！」

「今雑用って言おうとしたな！　霊夢さんに頼んで撃ち落してやる  
！」

「な、それだけは勘弁してくれ！ 真赤になって落ちちゃっせ！」

「赤い……紅い彗星ですね、分かります」

「何だそれ」

「いえ何でも。てか確か紫さんの話だと魔法の森って毒ありまくりじゃなかったですか？」

「能力使えばいいと思うぜ。あるんだろ、能力？」

「はいです」

言いながら、自分の周りの空気を毒を弾く様に『変化』させる。見た目的には何も変わっていないが、魔法の森に行けば分かるだろう。いや、毒って見えるのか……？ ていうかキノコの胞子とかじゃなかったっけか。

……松茸一回でも良いから食いたかったな。いや、でも紫さんに頼めば大丈夫かな。その代わり何を要求されるのか分かったもんじゃないけど。

「さてえと、それじゃ魔法の森に到着だぜ」

「迷宮みたいですね」

「迷いの竹林程じゃないと思うぜ？」

「ゲームのダンジョンみたいですね」

「……？」

「小首を傾げた魔理沙さんも中々良いですね、カメラを持っていなかった事が非常に悔やまれて仕方が無い。……おーけー、分かった、謝るからその手にもったカードを下げるんだ。非常にヤバイ事になりそうで困る」

「この寛大な心に免じて許してやるぜ」

「そして雑用が増えるんですね、分かります」

「な、何故バレた！」 「ちよつとは遠慮しろや」

「……その位砕けた口調出来るなら、さん付けしない方がいいと思っ  
うぜ？」

「俺がさん付けを止めた時は俺のキャラが崩壊する時です。俺のキャラが崩壊する時は俺が死ぬ時です。ていうか俺がキレちゃったみたいなの時だけです。てか何その引いた目は、おいこら」

「元々変人だと思っていたがこれ程とはっ……」

「潰すぞ魔法使い」

軽口を叩きながら、魔法の森の入り口らしい所に降りる。篋から弾けるように飛びのき、すっと息を吸う。大丈夫だ、体は動く。毒は先程の変化でちゃんと来なくなっているようだ。

周りを見渡すが辺りは闇ばかり。夜なのだから当然か。だが一応という事もあるので、手のひらの周りにある空気を明かりへと変化させる。当然出来た。余りにもチートすぎる気がする。

「おお、灯りだ」

「一応です」

しかし霊夢さんに生活すると告げたその日に拉致される事になるとは思っていなかった。目が覚めると空なのだから驚き。そういえば余りにも寒かったから服を防寒に変えたんだっけ。今の季節は秋だろうか……外の世界と時間軸がずれて居ないのか。

「あ、あと妖怪出ることあるから気をつけるよー」

「……魔理沙さんに任せたいんですけど」

「何言ってるんだ私は乙女だぜ」

「どこの世界にこんな人間らしからぬ乙女が居るのでしょう。霊夢さんに聞きましたよ、どれだけ貴女が恐ろしいか。ああ僕はそんな魔女に連れ去られた哀れな子羊。よよよ……」

「きもっ」「すみません調子乗りすぎました」

……しかし、妖怪か。一体どんな妖怪だろうか。興味が湧いてくる。

いや、どんな妖怪という事もないのか。事実、紫さんのような妖怪も居る。偏見は恐ろしく、油断を誘う。

「それじゃあ……行きましようか」

「おうっ、魔理沙さんに任せとけ！」

俺は、正直なめていたのだと思う。

生物が　死ぬという事に。

なめていたのだと思う。

魔理沙さんが自らに襲い掛かる妖怪を殺すのは当たり前の事だ。

その当たり前の事を目にして　俺は後悔した。生物なのだから血と同じような液体も出るだろう。そして同時に手足と思われる部分は玩具のようにひしゃげ、顔面は豆腐のように粉碎され、半身は面白おかしく吹き飛ばす。

当たり前　そう、当たり前なのだ。やらなければ死ぬという時点で、相手を殺すのはもはや必然。当たり前。

結局俺は甘かった。楽観的だった。楽観的すぎた。軽く捉えていた。

生き物は、死ぬ。

終わらないものは無い。

いつ終わるかは分からない。

でもいつかは終わるのだ。

「おい、大丈夫か？」

軽やかな笑みを浮かべて、魔理沙さんは近づいてきた。

だから、ぎこちない笑みを浮かべて、俺は口を開く。

「はい、大丈夫です」

口から出たのは 吐きなれた嘘だった。

でもバレなければ嘘は真にすり替わる。この嘘も結局、真に変わる。

「嘘だろ」

魔理沙さんは断言する。金色の混じったその瞳を少し細めて、確信をもった音色で断言する。

嘘は嘘で終わった。

思わず、唾を飲み込んだ。辺りは暗い。風が揺らす木の葉の音しか聞こえない。ひらりと、風にまって葉は落ちた。

手のひらから漏れた僅かな光は、魔理沙さんの悲しそうな表情を一瞬だけ映した。

けれど、俺の喉は震えない。大気を揺らす「嘘じゃないです」という言の葉は、落ちてはこない。

「バレちゃいましたか」

代わりに、清しい程の音色で俺の言葉は落ちた。暗闇に溶けるように消える音。その余韻全てを聞き入るようにながら、魔理沙さんは目を閉じた。

そして、辺りが静まり返った時、魔理沙さんは目を開ける。

「私を誰だと思ってるんだ 普通の魔法使い、霧雨魔理沙さんだ  
ぜ」

晴れやかな笑みと共に魔理沙さんは告げる。

嘘。

「この俺を前にして嘘を表すなんて、愚か過ぎて言葉も出ません」

「何、言ってるんだよ。私が嘘なんて吐くはずないぜ」

嘘。

「それじゃあその悲しそうな瞳をどうかしてください」

「……おかしいぜ、お前」

嘘。

「大丈夫ですよ、別に俺は魔理沙さんを変な目で見るともりはありません」

「だから、だから何言って」

「俺が甘いだけだったっつってんだよッ！ お前が妖怪を殺すのは

俺の為だったんだろっがッ！ それを恐怖しちまった俺が悪いって  
そう言っただよッ！ お前まだ俺と歳ほとんど変わらねえだ  
ろっがッ！ 見かけ相応なんだろっがッ！ もっと 頼ってくれ  
よー！

俺は。

「悔しいんだよおッ！」

この少女に何もかも押し付けて  
妖怪を殺すという事も押し付けて  
拳句の果てには生物を殺す少女に恐怖して

押し付けられた少女は何も言わず  
俺を守る為に少女は妖怪を殺す業を背負い  
俺に恐怖されても俺を気遣い

俺は

「無理は、するもんじゃないぜ」

「貴女に言えた台詞じゃないでしょ」

「そいつは酷いぜ」



「なら泣くのを止めてみるよ」

「……意地悪だぜ」

「ほらお兄ちゃんが胸貸してやるよ」

「お前十六歳だろ？ 私は十七だぜ」

「お前は女で俺は男だろっ」

「よく言っぜ」

「ほら吹きなもんで」

幸せに生活できるよう、強くならないといけない。

### 三話 決意と嘘（後書き）

作者の東方知識はここに載っている小説様を拝見させて頂いた程度です。

魔理沙さんの口調は書き辛い。ただ性格は女の子なんだからあんなだろっと思う。強がりなんだぜ魔理沙ちゃん！ ってか。

#### 四話 真の決意は嘔吐きに

「……………正直言つと、汚い」

「あははっ……………は。は。まあ、アレだぜ！ 乙女の秘密っていうもんだぜ！」

「……………さすがに今日は働きませんよ？ 後雑用だとしても報酬は頂きますからね？」

言った瞬間舌打ちが聞こえたような気がする。気のせいだと信じたい。そして報酬を貰うくらい普通の事だろうかと叫んでみたい。

しかし見事に散らかっている。俺じゃ一生解読出来ないような文字の書かれた本があちこちに散らばっていて……………いや、文字そのものを変化させれば、あるいは読むことが出来るか。ただそんな事の為に能力を使うのは、卑怯だと思う。

思うだけだけど。

「まあ、とりあえず、アレだぜ！ 今日遅いからお風呂入って寝ることにしようぜ」

「あ……………」

「無いと思うけど」応言っておくぜ。覗いたら殺す」

「いやいや、俺が覗くような人間に見えますか？」

「ある意味じゃ見える」

「酷えな」

先程まで涙を垂らしてた姿は微塵もなく、そこには元氣溢れるいつも通りの魔理沙さんが居た。やはりこの人にはこういう表情が一番似合っているだろう。というかしっくりくる。

だから俺はいつも通りの胡散臭い笑みを浮かべて、足場に注意しながら腰を下ろした。魔理沙さんはそれを見てから廊下を歩いていき、風呂場に向かったのだろうか。残念ながらまだこの家自体を把握していない俺には分からない。

ふう、と。

溜息を一つ吐いた。瞬間、怒涛の勢いで疲れが溢れ出てくる。今日は色々な事が有りすぎたのだろう。さすがの俺でも許容範囲を越えるような出来事が、たくさんあった。そもそもこの世界に来たという事実が、未だ飲み込めていない気がする。

いつもならば今頃　そこまで考えて、それを振り払うように頭を振った。それはもう過去の出来事なのだ、それはもう過去の光景なのだ、それはもう過去の思い出なのだ　今、思い出して後悔するのは愚の骨頂だろう。

そんなヘマは、二度と犯したくない。

そんな愚者には、二度となりたくない。

過去を思い出し死ぬ位ならば　今を生きて後悔していたい。

「胡散臭いよなあ……」

何もかもが、胡散臭い。

この世界も、この世界の住人も、この世界の住人である紫さんや霊夢さんや魔理沙さんや妖怪達も、そして魔理沙さんが見せたあの涙も、あの泣き顔も　俺にとっては、胡散臭い。

それは、きつと俺の心がまだここに定着していないからなのか  
定着したと錯覚しているだけなのかもしれない。

「そもそも、こんな事考えてる時点で定着してる訳ねえよなあ」

そんな、独白。

誰にも聞こえない、独白。

「あらあら お困りのようですね」

瞬間 背筋が凍った。紛れも無く、俺の体は硬直した。動かない。冷や汗がだらだらと体全体を蒸し始めた。喉が急激に渴き、水分を欲する。いつの間にか握っていた拳から、手汗が滲んだ。

「ごくりと、生唾を飲み込む。背後からの声に、未だ俺は喋る事が出来ない。声の主は分かっている。分かっているから振り向いて、いつも通り胡散臭く挨拶すればいい。それが、出来ない。」

何故か？

愚問だ。

紫さんが俺に対して敵意を向けているからだ。

何故か？

愚問だ。

俺がうじうじしているからに、決まっているだろう。

「先程までの 素敵な御仁はどこに行ってしまったのでしょうね？」

魔理沙さんにあんな台詞を吐いて。

例え妄言だとしても。

例え虚言だとしても。

例え戯言だとしても。

例え　　嘘だとしても。

俺は決心したはずだ。ついさつき決心したはずなんだ。強くなる  
と思ったはずだ。なのに　　何故？　　何故今更俺はこんな事を考  
える？

過去を思い出すのは簡単だ。

未来を思い浮かべるのは簡単だ。

でも現在を進行させる事は難しい。苦しかった過去？　理想の未  
来？　馬鹿か。今は今だろくに。ああ　　もう、嘔吐きともあろう  
者が、本当に情けない。

「ここに居るのは　　迷い困惑している蛆虫一人なのでしょ  
うかね  
え」

背後から囁くように聴こえる妖艶なまでの声。蛆虫？　正解だ。

すうっと、息を吸った。魔理沙さんが来る前に俺は言わなくちゃ  
いけない事がある。

「いえいえ　　何千年も生きた妖怪が一匹、居るようです」

突然、凄まじい威圧感がぱたりと消えた。ふっと、体が楽  
になる。強張っていた体が弛緩する。

すると唐突に背後に何かが当たった。そして白くしなやかな手が  
俺の体を包み込むようにした。

あつ、やべえ怒らせたかもしれねえ。

「幻想郷は全てを受け入れる場所ですわ　だからこそ、貴方の本能がここを望んだのです」

甘い吐息と共に耳の中に進入してくる囁く言葉。電流のような言いようも無い快感が全身を貫く。落ち着け、冷静になれ、落ち着くんだ。本能、そうか本能か、本能が……ヤバイ駄目だ年頃の少年には刺激が強すぎる。

「……離してくれませんか？　暑すぎて窮屈です」

「あら？　恥ずかしいのかしら？」

「まさか。俺は女慣れしているから恥ずかしくありません」

そんな嘘。

「……ふうー」

耳に息を吐かれた。本能的に体がびくびくつてなりました。駄目。伊達に千年以上生きていないのか。男の操り方を完璧マスターしてやがるっ！

「あらあら？　女慣れしているんじゃないのかしら？」

「耳に息吐かれたら誰だってああなりますとも」

「下半身もかしら？」

「すみませんでした！　これ以上言わないでください俺の精神がズ

夕ボロになっちゃいます」

「私は最初貴方にされたのだけれど？」

「アレは紫さんの良心に漬けこんで嘔八百吐いてました」

「最低ね」

まあ確かに嘔吐くのは最低……？ どうだろう。そこら辺分らない。とりあえず拘束を解いて欲しい。カムバック魔理沙さん。魔理沙さんが居ないと貞操が危ない。どうして女の風呂はこつも長いんだと問い詰めたくなってきた。もうかれこれ十分は経過しているはずである。

というか眠くなってきた。紫さんに抱きつかれてるからか、何だか暖かい。心地のよい暖かさ。

……駄目だ、これ寝よう。

「おやすみなさい」

「随分唐突ですわね」

何て言われたけど構わない。座ったまま寝るのは外の世界で慣れているからそれほど苦でもないし。

まあ。

外の世界なんてどうでもいいんだけどね。



「……オーケー、落ち着け俺」

目の前に魔理沙さんの寝顔。

意識を覚醒してみるとここはベット。

寝たのは床だ。

……俺が寝惚けてここに入ったのか、はたまた魔理沙さんが連れてきたのか。

後者であるとありがたいが、前者だったら間違いなく殺される。

逃げようにも魔理沙さんが俺の制服を掴んでいるんだから無理である。

ここでオウマイコーラとか言ったら死ぬだろうか。どうしても叫びたい気分。

「とりあえず死ぬのは意識が無い時にしてほしい」

「……ん、んう………」

だらだらだらだら冷や汗が……。

「うううん………え？」

「……え？　なんで魔理沙さんが居るんですか？　あれえおかしい。俺は床で寝たはずなのに」

「……おはようだぜ」

「……おはようです」

「……………」

とりあえず無言。無言無言。

「こういう空気になれているのは良い事なのか悪い事なのか。」

「ああ…………えっと、状況把握が出来てないんだが…………えと、その、つまりそういう事でいいのか？」

頬をちよつと朱に染めて恥ずかしそうに目を逸らし、魔理沙さんは言う。

…………いや違うと思う。

「いや、それは違うかと……………」

「恥ずかしがらなくていいんだぜ？」

「いや、本当に違うかと……………」

「私が年上だからなあ……………」

おいコイツ全然話聴いてねえぞ。つか変化させる能力があるんだからそれで抜け出せばよかった！ 何故今頃になって出てくるんだそんな妙案！

「あのー、俺が寝惚けてここに入っちゃっただけだと思っんですよ……………」

「ん？ 何だそつなのか？」

「はいはいはい」 余裕の三回頷き。

「ちっ  
」

……魔理沙さんは良い子です。

……俺が年下だから気を使ってくれる良い子です。

……だからあの舌打ちはどこそその隙間妖怪さんのものです。

……そう信じたい。

五話 名無しの怒り（前書き）

人形遣い！。

## 五話 名無しの怒り

ここが外の世界だったら間違いなくゴキブリが這い回っていきそうな埃だらけの部屋。変化させる能力はあまり使いたくないので、箒を使って掃除しているが……終わる気配が見えない。魔理沙さんは俺に仕事を頼むと茸を採りに行くとか言っただけでどこかに消えた。まだ朝頃だから家に妖怪が襲ってくるとかは無いだろう。そもそもどんな原理か知らないが、そんなに家の外見は悪くなかった所から見ると今まで家は妖怪に襲われていないようだった。それが撃退しているのか。

ただ撃退しているのだとしたら、ここに俺を残す意味は無い。俺は戦闘能力皆無なのだから、家を壊されなくなかったら残さないだろう。つまり何らかの手段で家は守られている……。果たしてそれは何なのか、気になって仕方が無い。

「……………掃除しなきゃな」

どうでもいい推理に回っていた脳みそを戻すように頭を左右に振って、息を吐く。太陽はもうじき正午を伝えるように、真上に昇るだろう。それまでにこの部屋は掃除しておきたい。というかまず、この膨大な量の本は一体どこから持ってきているのだろう。

考えていても仕方が無いので片っ端から本を取り、一箇所に纏めていく。喘息持ちだったら発狂していそうな位の埃が漫画みたいに溢れ出てきた。ああ、どうしてこんな所で生きれるのか……なんて失礼な事を考えてしまった。

落ちていく埃を箒によって部屋の中央に纏め、ちりりりのような物で拾っていく。ゴミは渡された袋に詰め込んでいき、それを幾度と無く繰り返し替えていく。

「……疲れる」

本当に疲れる。溜息を一つ漏らし、ゴミ袋を縛った。これで何袋目だろう。少なくとも片手の指じや数えきれない程のゴミ袋は溜まったはずだ。処理の方法は言っただけでなかったはずだから、俺に任せるといった所だろうか。さてどうしようか。

考えながら埃などを拾ったり、転がっているガラクタを拾ったりしていると、いつの間にか作業は終了していた。残されたのは昼になって輝きを増した太陽の光と、その光によって煌くゴミ袋の山のみ。……本当にこれどうするんだろう。魔理沙さんは魔法使いだし、このゴミ袋の山を消す位造作ないのだろうか……変化させる能力では消す事は出来ない。

「捨てにいくかな」

と思い立って……ここはゴミ袋を捨てる場所など無い事に思い至った。紫さんとか居ないかな……居たら隙間でどっかに送って欲しい。送られた人は困るだろうが。

どちらにせよ処理は俺がするしかないという事か。とりあえずこの場面じゃ仕方ないし、能力を使う事にしよう。ゴミ袋の山を『空気』に変化。

瞬間、凄まじい量の埃が空中に舞った。

……フリーズしていた脳みそを解凍する。ゴミ『袋』を空気に変えちゃ駄目だろ。俺は馬鹿なのか。馬鹿なんだろう。ああ……もう嫌になってくる。もう一度能力を使おうとして 膝がかくりと落ちた。いや、折れたというべきか。呆気なく、俺の足が悲鳴を浴びたのだ。

掃除のせい？ そんな訳ない。

能力の副作用。

凄まじく効果のある薬ほど、副作用があるのと同じ。俺の能力はそんなに使えるものじゃないのだ。精々一日二回が限度といった所。それ以上使えば、体がもたない。

だから霊夢さんと闘った時も、気力が持たなかったのだと思う。しかし、今能力を使わなかったら魔理沙さんに何言われるか分からない。

ので、舞っている埃共を全て紙に変えた。空気などに変えるのは負担が大きすぎるので、これが最良だろう。もう紙切れをぼうつと眺めながら、ぱたりとうつ伏せに倒れた。心臓がマラソンを走りきった直後のようにばくばくと鳴っているのに対し、体は馬鹿みたいに冷え始める。このまま倒れたらますます体温が下がるばかりだ。

「日向に……」

脱力した体を何とか動かして、蛆虫のように這いながら日向に向かう。昼を目前に構えた太陽の直射日光は、しかし秋という事も関係してかとても気持ちがいい。朝からの労働と能力の限度である二回使用、疲労のピークに達していた事もあり、瞼は驚く程自然に閉ざされた。

ひんやりとした風が体を撫上げたとき、既に俺の意識は半分程沈んでいた。後、一息で……寝れるだろう。

「おーいつ、掃除終わったかー！」

「ちょっと魔理沙、少しは声静めなさいよ」

おいおい……勘弁してはくれないのか。朦朧とする意識でそう呟

いて、無理やし意識を覚醒させる。鉛のように重い瞼は幾度と無く落ちるが、気力で目を見開く。ふらつく足で立ち上がり、玄関へ歩いていくと、魔理沙さんと横に少女が一人。

金髪がショートカットになっており、長さは肩位までか。赤いヘアバンドをしていて、それが似合っている。肩の辺りには人形が浮いていた。……人形？ 妖精みたいだ。ただ小さすぎるから、やはり人形なんだろう。

「掃除は一応終わりましたよ。……はじめまして、こんにちは」

「もう終わったのか！ 流石だぜ！ これで手伝わなくてすんだ」

「魔理沙、アンタ自重しなさいよ。……はじめまして」

こんにちはは、は無しか。どうやらそこまで友好的な関係は築きたくないのかな？ いや、それよりも名前を名乗っていないからか。名前 名前、ねえ。

「シャンハイッ！」

……人形が喋りやがった。

「シャンハイ？」

こちらの表情を覗き込むように近づいてくる人形。意思があるのか、それともこの人の術なのだろうか？ ちらりと横目で少女を見ると、額に手を当ててやれやれと言った風に頭を振っていた。

術……じゃあ、無いよなあ。

「……シャンハイ」



「シャンハイ！」

「上海？」

「シャンハイ？」

「シャンハイ！」

「シャンハイッ！」

「シャンハイ！」

「シャンハイ！」

肩に乗ってくるシャンハイという人形。ヤバい、何コレ可愛い。癒される。余りにも和むので疲れを癒そうとして、その後二、三分シャンハイシャンハイ言い合っていた。

はっ！ と我に返って魔理沙と少女の方を見ると、首を斜めに傾けてジト目をしていた。何かに目覚めそうだからそんな表情しないで欲しい。というか呆れられた。

「ええと……この人形、凄いですね」

「まあ、ね。一応言っておくけど私は操っていないわよ？」

「……意思を持った人形、ですか」

「ま、そんな所ね」

……ここでそれを褒め称えても、別に嬉しく感じはしないだろう。言われ慣れている事を言われても、大して嬉しくないのだ。嬉しいと感じているのは上辺の感情。深層では何か違う事を求めているはずだ。

「あつ、そうだ！ 忘れてたぜ、報酬」

「あ、そういえばそうでしたね」

「持ってくるからちよつと待ってるおー！」

言いながらとたとたと歩いていく魔理沙さんを見てから、それから少女の方を見る。

「……俺は 名前が無いんです」

そして視線を宙に彷徨わせた。言うのに躊躇っていた昨日までの俺は、居ない。もう過去は見ないと決心したのだ。俺は、だから今出来る事をする。

俺に出来るのは、それだけしかない。

宙を彷徨っていた視線を、目の前の少女の瞳に向ける。

「名前……が？」

「はい だから先程、名前を言わなかった事は詫びません」

瞬間 少女の視線に影が差した。全てを射るような視線に変化したそれが 俺の瞳を捉える。

詫びないという言葉に対して 威嚇しているのだろう。肩の辺りに彷徨っていたシャンハイ人形が、ふらりと身を返して少女に向

かう。

そして同じように、こちらを威嚇しはじめた。

「詫びないって　　どういう事かしらね」

「どういう事も　　無いですよ」

気圧されたら、負ける。踏みとどまれ。千年生きた紫さんよりは、マシだ。それ程の脅威は感じない　　とは言っても、この少女が人間じゃない事は理解した。直感というよりは、雰囲気が違うのだ。人間味を　　感じない。俺のように何の力も持たない人間に、殺意を向けているのが何よりの証拠である。魔理沙さんと仲良くやっているのは　　魔理沙さんが強いから以外に理由は無いだろう。

「　　ただ、事実として。俺は名前が無いんです」

「もう一度言っわ　　謝りなさい」

「ごうっと、人間が纏うオーラとは違う何かが、噴出された。完全なる怒り、憤怒の念。撒き散らされる殺気と、殺意。自然と喉が渴く。湿り気を無くした喉が声を出さない。

けれど　　それでも俺は謝る事は出来ない。気圧されたら終わるだ。怖がったら負けだ。

恐れる位なら、謝れ。

上辺だけの謝罪をしる。

上辺だけの許しを得る。

そんなのは、嫌だ。

上辺だけの謝罪などしない。

上辺だけの許しなど要らない。

「何故 謝らなければならぬ？」

だから、怒れ。他人の感情など目にも入れないこの少女に怒れ。自分と同じような強さしか求めないような少女に怒れ。弱者など眼中に入れない少女に怒れ。他人の事情など気にもとめない少女にいかれ。己の感情しか計算に入れない少女に怒れ。己の非礼を認めない少女に怒れ。事実を理解しない少女に怒れ。

俺は 俺だ。

「俺には名前が無い 名前が無い事を、お前に謝らなければならぬのか？ 俺はつ、自らの不幸を他人に謝罪しなければならぬのか？」

脱力する体に鞭を入れる。脱力する心に鞭を入れる。

「お前は俺に 謝れ」

同時に体が吹き飛び、気が付いた時には床に体を打ち付けていた。ちかちか点滅する視界には、無表情に手をこちらに向けた少女の姿があった。こんなもの 霊夢さんの一撃に比べれば屁でもない。

立ち上がり、少女に指を指した。

「すぐに力に訴えかけるのかよ、弱者」

精一杯の虚勢。これ以上の能力発動は危険だし、もう能力を二回も使用しているのだから粘る気力も薄れている。 だけど、それがどうした。

「　　つて！　おいお前ら何してんだよ！」

背後からの声。魔理沙さんだろう。少女の殺意と殺気が一気に無くなる。

腑抜けが。

「来いよ　本気で。俺はお前みたいな八方美人が、一番嫌いなんだ」

だから、俺は自分が一番嫌いなのだ。

「私相手に喧嘩売る人間なんて初めてよ……いいわ、殺し合いますよ（やりあいませよ）」

「おいつ、お前ら何を　？」

「じゃあ　外に行きましようか」

今、俺はどの位血を吐き出しただろうか。仰向けに倒れて太陽の光を受けながら、そんな事を考える。あの少女は今倒れている俺を見て、きつと呆れている事だろう。戦闘開始後一分も経たずして、こんな重傷を負ってしまったのだから当たり前だ。

能力を使えばケリが付くのだろうが、死ぬかもしれないリスクは背負えない。

「……あんな威勢がよくてそれって、呆れるわ」

心底どうでもよさそうな音色の声。立ち上がるうとして、力が出ない事に気が付く。疲労による疲労は、魔理沙さんの家にあった埃のように溜まっていたのだろう。ああ、もうどうしようもない。やはり戦闘経験も無しで挑むのが間違いだったのだろうか？

今の俺を見たら、紫さんは呆れるだろう。ああ、どうしたもんか。本当に　どうしようもない。

名前が無いのと同じくらい　どうしようもない。

「で？　立ち上がらない所を見ると決着かしら？　そのまま立たなかったら止めは刺さないから安心しなさい。まあ、元より痛めつけるだけだったから」

声が、段々と遠ざかっていく。それは俺の意識の薄れではなく、文字通り　少女が歩いていったのだろう。このままで良い訳無い。

どうしようもなく　往生際が悪い嘘吐きが俺なのだ。

「待て　よ」

出てきた言葉は　しかし小さかった。既に声を出す事すらままならないのか。今更ながら自分に嫌気が差す。先程までの威勢はどうしたんだ　本当に、本当に、情けない。

けど能力さえあれば　俺は勝てた。コンディションが違かったのだ。これは仕方無い。そう　仕方無いんだ。

この負けは、仕方無い。明日になれば、勝てるはずだ。能力を使って、相手の攻撃そのものを変化させてしまえば　勝てるはずだ。明日勝つたら何て言おうか。負けを認めさせて謝らせるか。ああ

それが良い。それが、一番良い。今は休み時だ。仕方無い敗戦の

疲れを癒して、明日勝てば良い。そう、勝てば良い。

。

。

それで、良いのか？

万全な状態で能力を使って勝つのは、当たり前じゃないか。

あんなチートみたいな能力で勝って、俺は良いのか？

フェアじゃない勝負で勝って、果たして少女は俺に謝るか？

違うだろ。

そうじゃないだろ。

仕方無くなってるんだ。

仕方無いなんてのは、逃げだ。

リスクを背負わなくてどうする。

今勝たなくて、どうする。

「待ってって……待ってって言うてんだろっがぁあッ！」

獣の咆哮。薄れかかっていた意識が電流を流されたように覚醒する。返事は無かった。立ち上がると、少女が足を止めてこちらを見ている。その目には、驚愕が浮かんでいた。そして、少女はゆっくりとこちらに向かってくる。

気圧するような威圧を浮かべながら、ゆっくりと近づいてくる。

アレは、一度痛い目を見せてやった獲物にやる一番効果的な動きだった。だが どうした。それが どうした。

俺は 俺であって 獲物なんかじゃない。

「来いよ 女」

「私は、女じゃなくてアリス・マーガトロイドよ」

「女に 変わりは無いだろう?」

減らず口を叩いた瞬間、アリスさんの周りに閃光が煌き、幾つかの弾が浮かんだ。来ると構えると同時、弾は凄まじい勢いで向かってくる。一発一発が、人間に耐え切れるような痛みじゃない。けれど耐えなければならぬ。

左右上下に襲い掛かる弾をかわしながら、アリスさんに近づく。近づくと弾の密度や威力があがる。けれど近づく。一発 喰らわせないと気に入らない。邪念 体勢を崩した所に、鳩尾に入る弾両足が浮いた。そのまま吹き飛ばされる。胸が嫌な感じに凹んだ気がした。骨が折れたのだろうか。近づいた分だけ、戻された。地面をバウンドし、滑るように転がる。受身の取り方など覚えていない。

けれど 立つ。

「うううおおおおおおおッ!」



叫び、右手を突き出した。  
覚悟を決める。

死ぬかもしれない覚悟を

死ぬ覚悟を決める。

『空気』を 『電気』に。

相手を気絶させる程度の『電撃』を生み出す。

何かに気づいたアリスさんが凄まじい量の弾を撃ってくる。それは弾幕という言葉が似合うだろう。

けれど 当たっても 倒れない。

範囲は アリスさんの周囲の空気。

「『空気』を 『電気』に 変換ッ！」

一瞬の間 それで、俺とアリスさんの体は崩れていた。

## 五話 名無しの怒り（後書き）

作者中三。高校受験。でも更新はする。

オーケー？

べ、別に応援して欲しいとか思っていないんだからねっ。

六話 怪我の巧妙真につきまして（前書き）

久しぶりに和やかターン。久しぶりというより初めて？

## 六話 怪我の巧妙真につきまして

意識が、覚醒する。粘着質な闇がざわざわと揺れ動き、光に変わっていった。重い身体が嘘みたいに軽くなり、これまた眼球に貼り付いていたような瞼が自然と取れた。

目を開けると、ぼんやりと顔が見えた。顔の輪郭。白い肌に大きな青い瞳、肩にかかる位の金髪が今はこちらに向かっている。顔を覗かれているのか。白くぼやけている視界が風に流されるように消えていく。視界が晴れた。

目の前にアリスさんが居た。

「……おはようございます」

「起きた、のね」

挨拶は返されなかった。返ってきたのは震える声。青い瞳には涙が浮かんでいる。ああ、俺のせいだ。体に力を込め、起き上がるうとしたが動かない。やはり能力の限界を超えた事が原因だろうか。ご都合主義のように覚醒とかはしなかったようだ。

事實は小説より奇なりとは言いが、んな事は無いのだと再確認させられる。覚醒も無ければ進化も無い、あるのは定められた限界でどれだけの事を出来るか。

「……ごめんなさい。魔理沙から、聞いたの。貴方は本当に名前が無い事を……それなのに、本当に、本当にごめんなさい」

何だ……信じられてなかったのか。いや、当たり前といえは当たり前だ。いくらこの世界でも、名前が無い存在なんてのは居ないだろう。ここが幻想郷と呼ばれる聖地であるならば、それは尚更

な事なのかもしれない。

というか、涙を流さないで欲しい。泣かれるのは嫌いだ。

「泣かないでくださいな。泣くのは、卑怯ですよ」

ひび割れた声が出た。起きたばかりだという事はまるで関係無く、ただ俺の体が限界なだけなのだろう。何だかこのままだと本当に死にそうな気がする。そもそも物質を空気に変換するだとか、空気を電気に変換するだという事が限界を決めている気がする。

米粒の大きさを二倍に変える　とかならば、十回以上は出来そうなのがする。というか、出来るだろう。そうじゃないと割に合わない。強力だからこそ、二回が限界。

「……そうね、ごめんなさい。魔理沙呼んでくるわね」

「どうも」

そう言ってアリスさんが部屋から出て行く。ふと、思う。

　　霊夢さんに殺されるんじゃないかね？　と。

やはりさすがに、まずいと思う。非常に。

だって泊まると言った日から行方不明で……ああ、ヤバイ。これは、絶対に何かしらの罰は喰らうはずだ。どうやって言い訳しよう……魔理沙さんに誘拐されましたとも言えば大丈夫な気がするが、ならこの怪我はどうするのだ。

……そこは妖怪にでも罪を被ってもらおうか。俺の命よりは妖怪の命、これは鉄則な法則。だって自分が何よりだもの。とか。

思ってたなら、凄まじい怒気がこちらに向かってきました。

「　　ああ、死んだ」

呟いた瞬間、けたたましい音を鳴り響かせて扉が開いた。自らの  
筭を握り締めている魔理沙さんと、それを必死に抑えようとしてい  
るアリスさんが見えた。頑張れアリスさん、貴女が振り払われたら  
俺は死ぬ。

思った矢先、魔理沙さんの手が煌いた。

「……タイムタイムタイム！ ちょっとストップして！ 謝るから  
！ ねえ謝るからその光を鎮めて！ 分かったごめん！ ごめんご  
めんごめん！」

「……遺言はそれで終わりか？」

「だから待ってて！ 待って待って！ つかアリスさん諦めたよう  
に手を離すな！ うわタイム！ 魔理沙さんタイム！ ストオオオ  
オオオツツプ！」

「……逝く準備は出来たか？」

「まだまだまだ！ まだ出来てないです！ というかそもそも魔理  
沙さんに怒られる理由が……いや本当ごめんなさい！ 分かりまし  
た分かりました理由分かりましたってば！」

「……お前、どんだけ私が心配したか分かってるか？ お前は生身  
の人間なんだぜ？ 魔法使いでも妖怪でも神でもない 人間なん  
だぜ？ 簡単に死ぬって事、理解してるか？」

金色の混じる瞳から、きらりと何かが光った。

「だから、死ぬよ？」

「おいちよつと待てその流れはおかしい。明らかにそれは間違いである事を俺は主張しよう。貴様は間違ってる！」

「死ね」

「分かったいや分かんない！ てかソコ！ ソコのアリスさんとシヤンハイ！ 笑ってないで助ける！ つかふらふらこっちに近寄るな魔理沙さん！ 怖いから怖いから！ ねえ怖いから！」

事切れた人形のようにフラフラ近寄ってくる魔理沙さん。ちよつとまって怖いんですけど。ていうか叫びすぎて喉が切れたんですけど。

「名無し如きが私に口答えするなあっ！」

「ばっ！ 乗るなあああああっ！」

ダイビングしてきた魔理沙さんによって全身が悲鳴を上げました。もう駄目だ。この痛みは駄目だ。死んだ方がマシな痛みだ。

「さあお仕置きだぜ！」

「何さらつとノリノリで恐ろしい事言ってるのっ！」

「お前には私の研究材料になってもらうぜ？ ちなみに拒否権は無い」

「阿呆かお前！ 何だ研究材料って！ そんな俺を殺したいかッ！」

「いや何安心してくれていいんだぜ。ちょっと体が敏感になる薬を三十個位飲んでもらいただけだから」

「何アブナイ事言ってるんだてめえ！ 敏感どころか空気にすら反応しちまうじゃねえかそんな飲んだら！ やっぱお前俺を殺す気だろ！」

「快感かもしれないぜ？」

「同じだろうがッ！ どつちにしろ耐えらんなくて死ぬわ！ お陀仏したら末の代まで呪ってやるからなッ！」

「おっ、という事は了承か」

「ちげええよ！ どこからどう見ても違えよ！ どんな耳したらそんな風に聴こえるんだよ！」

「そんな事言う口にはお仕置きだぜ」

「なんやねんお前ほんま！」

エセ関西弁。というかそんな事言いながら口近づけてくるんじやねえ！

「お前は年頃の少年がどれだけ獣なのかを知らない！」

「私に敵うのか？」

「いや無理か」



「無理だぜ」

無理でした。

「……さすがに手までも動かないとは思っていなかった」

何て呟きながら、アリスさんに肩を貸されて廊下を歩く。歩くといても、膝からがくんがくんの蛸みたいになっているので引き摺られているようなものだ。

アリスさんはもう大分慣れたようで、普通に喋ってくれる。というか俺が誤解さえさせていなければ、最初から良好な関係は築けただろうと思う。

「今から鍛えれば能力の限界が無くなるかもしれないわよ？」

「そしたら無敵でしょうね。いや、敵は出てくるから最強か」

「……敬語なのね」

「ええまあ、普段はコレなんで」

窓から差し込む昼の光を浴びながらそんな会話を繰り返し、昼食を食べる場所に移動する。

既に魔理沙さんが昼食を準備していた。

「おっ、動けるのか」

「何処を見たらそう言えるのか俺には分かりません。節穴ですか」

「毒舌だぜ」

「あんな事されたら……ね」

はははと魂の抜けたような笑みがこぼれた。

「嫌だったか？」

「男にとってあーんされるのがどれだけ屈辱なのか貴女は分かっている……」

朝食の時にあーんされて食べさせられたのは、忘れられない黒歴史に認定されるだろう。

羨ましいと感じていた若かりし頃の俺には拳骨を食らわせない。

……あれは本当に屈辱だった。

そして今、昼食。

「さ……あーんして食べるか？」

「絶対いやだ」

にやにやした笑みを浮かべながら食べさせてくる魔理沙さんは、やはり魔女なのだろうと思った。赤ちゃんの時を思い浮かべると恥ずかしくなるが、それと同じなのだ。

……。

「顔真赤だぜ？」

「……いつか絶対仕返ししてやるから覚えとけよ」

六話 怪我の巧妙真につきまして（後書き）

短い。短すぎるッ！

高校受験中の作者にエールを！

七話 死を覚悟した嘔吐きの言葉（前書き）

サブタイトル全部変更。

## 七話 死を覚悟した嘔吐きの言葉

俺は、間違いないく死ぬ。

心の底の隅からそう思えて仕方が無い。余りにも 出来すぎた舞台。背後からこちらに歩み寄ってくるのは、きつと魔理沙さんから忠告を受けた風見幽香本人に違いないだろう。

……今は秋だから、居ないはずだとは言われていたが、やはり俺は運の悪さに定評があるようだ。手入れの行き届いた土を踏む俺の足は、小刻みに震えている。制服が大きいからか、幸いにも震えているのを悟られる事は無いだろう。

さく。さく。さく。

小気味良い音を響かせている足音は、死神が旋風のようなだった。死神が 近づいてきているのが分かる。こんな事になるのなら、アリスさんにも頼んで博麗神社に送ってもらわなければならない。ただの好奇心で こんな事になるとは思っていなかった。

能力を使えば なんてことは、自然と思わない。使っても、意味が無いのだ。空気を毒ガスに変えようと、空気を刃に変えようと、相手の攻撃を反射しようとも 意味が無い。圧倒的なまでの実力差があるのだ。だから 無理。

さく。さく。さく。

勿論逃げようとしても捕まえられるだろう。それ程までに圧倒的な存在だと、魔理沙さんに嫌になるほど聞いた。けれどまさかここまでとは けれどまさか、ここまで恐ろしい存在だとは思わなかった。

全ての者を平伏させるような威圧感が、背後から注がれている。それは紫さんよりもキツく、けれどまだ本気ではないのだろう。ここで俺が土下座でもすれば？　いや、駄目だ。そんな事をした瞬間に、首が吹き飛ぶ。

さく。さく。さく。

どうする？　どうすればいい？　死ぬ訳には行かない。

「　　こんにちは」

だからこそその　　先手。振り返り、ぺこりと小さく頭を下げた。その仕草の中、若干微笑みを魅せている幽香さんが居た。瞳は紅色で、緑色の髪が淡く揺れているのが見えた。　　下手に出るなど、愚の骨頂。

例え幻想郷最強であろうと　　今は対等なのだ。

「こんにちは。こんな所でどうなされましたか？」

ごくりと、生唾を飲み込もうとした　　それを押しとどめる。

緊張などして声が震えてしまえば、それは即ち相手を見上げる行為だ。そんな事をしてしまえば、俺の心はもう二度とこの人に立ち向かう事が出来なくなってしまう。

あくまで　　対等だ。

「いや、迷子になってしまいましたね」

口は上手く笑みを描いているだろうか？　こんな場面は久しぶりだ。二度とこんな腹の探りあいはいはしなないと思っていたが、やは

り分からない。

皮肉など言ってしまうえば首が即刎ねられるなんて場面　負け戦  
だろうに。

だが　強いからこそ、踏み込める。

「それはそれは、災難でしたね」

口調はあちらも普通だ。だがその節々から、何かが漏れ出している。

それは　弱者に対する威圧か。普通ならば感じられない程度の  
微弱な威圧　それが、恐い。

感じれない方がどれだけ幸せだっただろうか。やっていられない。

「ええ　本当に災難でしてね。そんな時にここが見えて、来てみ  
たのですよ」

穴は出してはいけない。間違っても、穴は出しちゃいけない。  
そして　穴を見つけて抉りこむ。

命賭け。

だからこそ　やる価値がある。

リスクの無い賭けに勝利などない。

リスクがあるからこそ　勝利を掴む事が出来る。

何としてでも、この自意識過剰な妖怪を対等な存在に下げ  
やる。例えその後死ぬ事になったとしても、俺は妖怪に人間の恐ろ  
しさを植え付ける事が出来るのだ。光栄な事この上無い。

魔理沙さんから聞いた通り、この妖怪が人間の事をそこらに転が



る石ころのようにしか思っていないのなら　俺は何としてでもその認識を叩き潰さなければならぬ。

それが、今出来る事。

「あら、そうなんですか。　それなら早く人里にお帰りになった方がよろしいかと思えますわ。この辺りには、恐ろしい妖怪が出るそうですから」

ふわっと、微弱な威圧が姿を現し始める。だが、俺は一步幽香さんに近づぐ。

「それはそれはおかしいですね　この辺りにはとても親切な妖怪が居ると聞いたのですが……果たして僕の聞き間違いでしょうかね？」

吐きなれた嘘。

びくりと　幽香さんの眉が動いた。

「ところで　貴女は一体どうしてこんな所に？」

にこりと　笑みを浮かべた。先程まで微笑んでいた幽香さんの頬が、引きつった。

「少々、気晴らしの散歩でもと」

「ほう、ですが家に帰った方がいいですよ？　貴女の言う事が真実であれば、危険な事この上無いですから」

「そうですね。そろそろお暇しようと思えますわ」

「そうした方がいいですね。僕も帰らなきゃならない」

そして、動かない。俺の体も幽香さんの体も動かない。俺は、背後を見せればその瞬間に消し飛ぶだろう。だから、動いてはいけない。ただ、思考に集中する。目の前の空気を鋼の壁に変えるときが 必ず来るだろう。

「ところで 聞いていいかしら？」

口調が 変わった。

「何ですか？」

「その妖怪が親切だと言ったのは 誰なのかしら？」

空気を

「俺ですよ」

鋼にッ！

瞬間、凄まじい金属音と共に砂塵が巻き上がり 目の前に固定された鋼が突き破られていた。たった一本の腕によって 破壊されていった。完膚なきまでに。

その時 体から何かが溢れ出ているのに気がついた。視線を下に向けてと 腹が撃ち抜かれている。痛みは感じていない。内臓

という内臓がその穴から溢れ出てきそうで、思わず腹を押さえる。熱かった。じわりと、何か、熱した牛乳のような熱さだ。

「一つ 教えてあげるわ。その妖怪が私よ」

声。んな事は知っている。とうの昔に知っている。声は出るだろうか。大丈夫だ。この位の怪我をした位で、気絶などしない。

「そして、貴方のその能力は何かしら？」

砂塵が舞い降りると、そこには白かった右腕を血に染めた幽香さんが居た。アレが俺の血か。びっくりして驚き戸惑うほどに 魅惑的だ。我ながら見事な血。

そんな事を重いながら、足を肩幅以上に開いて胸を出す。

仁王立ち。

「なに、ちょっとばかし変換しただけですとも」

「そう、でも……全然ね。ああでも、腹を突き破られて悲鳴一つ上げない人間は貴方が初めてよ。最近の人間は根性が無いと聞いていたけど、そうでもないのね。外人だからかしら？」

「まあ、能力は最近身についたばかりですからねえ。あれ、やっぱり分かつちやいます？ 外人人って」

「妖怪が出るのにも関わらず人里から出る人間なんて 不死身と半獣しかいないもの」

「そいつは人間とは言えないですねえ。笑える冗談です、本当に」

「そういう割には笑ってないわね」

「笑えませんか」

そう言って笑う。

と、幽香さんは一歩近づいてきた。距離が更に縮む。凄まじい威圧感と、溢れ出てくる何かの力。そして獲物を嬲るような視線。その中に混じる殺気。

そこで初めて、ごくりと生唾を飲み込んだ。同時に 変換する。

「その体勢は止めないのかしら？」

「止める気なんてありませんよ。だからこそその仁王立ちなんですか」

「何発、持つかしらねえ？」

その体勢と、根性は。

そう聴こえた瞬間には、左肩に尋常じゃない衝撃を受けて空中をくるくる回っていた。急な衝撃に、口からは血が漏れた。そのまま受身も取れぬまま、地面に墜落する。背中から落ちた為、傷が更に痛み出す。

ああ もう、最近は何でこつも死にやすいんだろう。

何て思いながら、ゆっくりと 立ち上がる。

さながら亡者のように。

さながら妖怪のように。  
さながら人外のように。  
さながら愚者のように。  
さながら幽霊のように。

さながら人間のよう。

「 貴方に、忠告だ」

そして、仁王立ち。真赤に染まる視界に映るのは幽香さん。  
次の瞬間には 視界が反転していた。天地がひっくり返り、地面を泳ぐ。気がついた時には地面に顔面から突っ込んでいた。動かない肩が悲鳴を上げ、出血を止めない腹は奇声を上げる。息をするのが苦しい。肋骨が折れたのだろうか。何たる不幸だ。  
ああ、吹き飛んだ理由がそれか。胸を両手の平で打たれたんだろ。その性で息が苦しく、血の臭いが止まらないんだ。

何て思いながら、ゆっくりと 立ち上がる。

さながら信者のように。  
さながら害虫のように。  
さながら犯人のように。  
さながら鬼畜のように。  
さながら病人のように。

さながら人間のよう。

「弱者を見くびると、いつか足元掬われるぜ」

轟音。

同時に幽香さんの立っていた足元が爆発した。

先程、生唾を飲み込むと同時に地中の土塊を手榴弾に変換していたのだ。

きつと、舞い散る砂塵の中で幽香さんは俺に止めを刺さんとしているだろう。

今にも飛び散る儂い命に止めを刺そうとしているだろう。

だが 俺は、言ったのだ。

ただの虚言を 真言に変えたのだ。

残念。

俺の 勝ちだ。

七話 死を覚悟した嘔吐きの言葉（後書き）

異変の時間軸を教えてください。今の作中季節は秋。来年の夏まで旅して紅魔館変をやるうか。

時間軸教えて！。

## 八話 博麗神社での日常

気がついたら、一度見たことのある天井があった。ほのかに香る畳の匂い。首を回すと、障子と窓から僅かに漏れた月の光があった。……博麗神社か。しかし風見幽香に殺されて死んだはずだが

いや、まだ殺されてはいなかった。

ただ、あそこから生き残るとは考えにくい。あの絶対的な最強に情けは無いはずだ。おかしいにも程が有る。何かが有ったはずだ。

あの後 俺が助かる何かが。

……可能性としては、紫さんだろうか。いや、それ以外に俺がここに居る理由が無い。しかし、腹を貫かれて肋骨も折られ、本来なら死んでもおかしくないはずだ。というか生きてる事自体が間違いのはず。

けれど生きている。何故？ 紫さんだろうかと何だろうと、あそこまでの怪我をすぐに治す人間など居ない。どういう事なのだろうかしかも今、痛みも違和感も無い。

そこで、妙に蒸し暑い事に気がついた。

秋、という季節では感じられない蒸し暑さ。もしかして 手で腹を摩ろうとすると、穴が無かった。完全な完治。完璧な完治。手術などをした形跡も無い。つまり自然治癒。そしてこんな怪我を自然治癒させるにはそれなりの時間がかかる。

この暑さは 夏のものではない。耐え切れないという事も無い。それに今俺は厚着をしているのだ。だから 春。秋の初期頃から春の中盤までといったところだろうか。つまり半年。



「……半年、寝たのか」

何と言うか、乙なものだ。ここまで寝たと分かると、睡眠のありがたさがよく分からなくなってくる。妙に目が冴えるのはその為だろうか。むくりと、起き上がる。何だか久しぶりに体が動いた気がした。骨が鳴る。

立ち上がると、全身の骨が歓声を上げた。何をそこまで喜んでいいのか問い詰めたい。自分の身体に。馬鹿すぎる考えだ。

「ああ　本当、笑える」

何で、生きてるんだろう。そんな考えが頭に浮かんだ。いつそのまま三十年位眠ったままの方が良い気もしてきた。余りにも格好がつかない。大丈夫だと言い張って魔理沙さんとアリスさんから別れ、アレほど忠告を受けたフラワーマスターに喧嘩を売り、そのフラワーマスター本人から瀕死に追い込まれる。

恥ずかしいにも程があるだろう。男の面子を保ちたかった。いや、こんな世界じゃそれも意味の無い虚言だろうか。はたまた妄言。どちらにせよ、くだらない言葉に過ぎない。

障子を開け放つと、春の空気が鼻腔をくすぐる。良い香り。久しぶりじゃないだろうか、こんな清しい気分になるのは。虚言も妄言も絶好調の今、素晴らしい背景だと思う。ここは幻想郷を一望できるのか……言葉に表せない。

しいていえば、月明かりに照らされた雪を見ているようなものだ。虚しさも感じれば時間の流れも感じる。悲しくも美しかった。それは俺の心の中だけだろうか。

縁側を歩こうとして、足を踏み出した瞬間、体がかくりと揺れた。

ああ、やはりか。半年も体を動かさないと、やっぱりこうなる。本当、体の軟弱さには困ったもんだ。どうしてこの軟弱な体が今まで途絶える事無かったのか、自分の事ながら不思議に思う。

けれど、やはり、それも妄言虚言の織り交ざった嘔吐きの嘘なんだろう。

「……寝るか」

出てきた言葉はそれだった。次、起きたとき果たしてそれは今日の次の日なのだろうか？ はたまた再び半年たった秋なのだろうか？

渋る体を引きずるようにして、元の部屋に戻る。襖を丁寧に閉め、今のさつきまで自分が寝ていた布団にもぐるようにして入った。

けれどやはり明日、俺は起きるだろう。

起きたとき。

誰も居なくなっていない事を、切に祈る。

小鳥の囀り。春を告げる何か。

そこで、俺の目は覚めた。目を開けても、別段何も変わる事は無い。ただどこかの部屋から、魔理沙さんの元気な声が聞こえるだけだ。……うっわ、これ死亡フラグ建った気がする。

起きて早々鬱な気分になりながら、布団をめぐり起き上がる。腹筋に力を込めて起き上がる事すら、中々に辛いのが現状だ。本当、不自由を極めていると思う。不自由の反対は自由だとか、そんな事

を妄言といわずして何とこのか。不自由は不自由なだけだ。

「……………今出て行ったら死にそうだよな」

とは言ったものの、襲い掛かる水への欲求は取れそうになかった。やはり喉が渴いていたのか。というか半年間、俺はどうしてたんだろう。水は貰うよな……………栄養は……………どうだろう？ 貰ったのだろうか？ 流動食？ 注射器何でもものは存在しないよな。

……………排便は？ さすがに……………しないよな？ したとしたら？ オムツか？ まさかのここでオムツか？ ムー…の？ いやいや、ないない。無いと信じたい。

馬鹿な考えのせいで、思考が纏まらなかった。

襖を開けた瞬間に出てきた霊夢さん。

「……………やばい、死ぬか」

思わず呟いてしまった。今ここで何か衝撃か加わった瞬間に俺はお陀仏するだろう。漫画の主人公とかラノベの主人公とかが羨ましく思う。

そんな呟きことを聞いたのだろう、霊夢さんは肩眉をぴくりと動かした。ああ、何でこんな時に言葉が出るのか……………やっぱりおかしいだろ俺の体。

「ま、あ。問い詰めるだけで良しとしてあげるから、さっさと来なさい」

若干の間を埋めるようにして、そんな声。あ、はい。とだけ返事をして、歩いていく霊夢さんを追いかける。そういえば冬の間もあ

んな巫女衣装なのだろうか？ 脇露出して寒くないんだろうか。  
とかいう思考の現実逃避。この場にアリスさんが居たら、更に俺は死ぬかもしれない。とか思ってたらアリスさんの声も聴こえてきた。思わず足を止める。霊夢さんはちらりとこちらを見た。  
そして再び歩いていく。絶対、今笑った。意地悪く笑った。後ろからでも分かるほど笑っただろ。こん畜生。

声に出したら即死間違いなしだろう事を考えながら再び歩き出す。足が重い。身体的にも精神的にも足が重い。あつ、そうだ変化させとけばいいんだ。服を鉄にでも変えたら、大丈夫だろ。あれ、つか何で服は無事なんだろうか。ぴかぴかになってやがる。

まあ、服を鉄に変換。

「っ　　うあああああああああああああ」

気がついた時には服の重さで体が沈んでました。死ぬかと思った。ていうか馬鹿か俺は。霊夢さんなんてじと目でこっち睨んでるし。呆れてるよあれ絶対。本当何やってんだ俺。

そして今の声に反応して、ちよつと奥の方の襖が開いた。出てきたのは魔理沙さんとアリスさん。死んだ。これ絶対死んだ。

「……………何で、生きてるんだ？」

……………今魔理沙さんに不吉な事を呟かれた。そりゃあそうだろうけども。結構ショッキングだ。

あつ、ほら見るそんな事言うからアリスさんに頭叩かれんだ。ばーかばーかばーか。再び一人呟いたら殺されそうな事を思ってみる。

「……………何で生きてるの？」

「てめえもかつ！」

思わず突っ込む。さすがに死んで当たり前みたいな反応されると気分が悪い。

でもこんなノリも好きだと思っ自分も居た。

「……幽香に喧嘩売ったのは、本当だったのか？」

あれ、何で知れてるの。紫さんのせいかな？

「残念ながら本当だったようで」

とりあえず変換をとく。沈んだ体が軽くなった。

「……くっ、くく……あはははっ！ お前らしいぜ！」

「ふ、ふふふ。本当ね、笑えるわ」

……笑われた。とりあえず死亡フラグが折ったようだ。はあと息を吐く。

「で、さあ尋問タイムだぜ！」

瞬間にフラグが復活。もしかしたら俺は不幸なのかもしれない。尋問タイムとか言っ拷問タイムなのは目に見えている。というか尋問されるような事は無い気がするが……。ああ、泣けてきた。

ひゅーるるーとか、目覚めの良い清涼な朝には似合わない音を効果音に付けたら似合いそうな感じで、俺は連行された。

地獄へ。

……そして、何故俺は酒を飲まされているのだろうか。既に酔っている感じの魔理沙さんに強制瓶ごと一気を強要されている今の俺は、果たして生き残る事が出来るのだろうか。

と、いつか、のらりくらりと酒はかわしてきたのに。さすがに駄目だろ。急性アルコール中毒やらなんやらで死んじまうだろ。

「んう、ほらあ、男なら一気だぜえ」

「いや、残念女です」

「物は付いてたぜ？」

「……………えーと？」

何だか地獄に突き落とされたような気分。

「ほら！ 名無し男！ 飲みなさい！」

「何で霊夢さんまで酒に吞まれてるの？ 馬鹿なの？ ねえ馬鹿なの？」

「じゅるじゅるさい！ ちゃんと飲みなさい！」

「お前がちゃんと飲めや」

ちらりと助けを求めるようにアリスさんを見るが、首を振っていた。そればかりか酒を勧めてきた。駄目だ、四面楚歌ならぬ『三面楚歌、けれど場所は三角形』みたいな感じだ。これは終わった。

「ま、男だしちょっと位は飲んだら？」

とかアリスさんは言ってくる。だから飲んだら大変な事になると言ってるんだが。

確か外の世界で実験とか言われてアルコール摂生したら、その後の実験に支障をきたす程の悪酔いだったと聞いた事がある。

「……飲めません」

「意気地なし」「根性なし」「つまらない男」

……なんだろう。

こいつら相手なら悪酔いしても良い気がする。

「魔理沙さん、酒瓶ください」

「おっ？ ほら一気だぜ！」

悪臭にしか感じられない酒という液体の入った瓶に口をつける。そのまま瓶を逆さまにした。口の端から溢れてくる程の量。味なんてしらない。ぐびぐびと飲み干していく。おおーとか言う歓声が聞こえたが無視。

そして瓶の半分程しか入っていなかった酒を飲み干した。ふうと息を吐く。

……頭くらくらししてきた。

「うああああああああ……」

「すっげえー」「さすが」「やるわね」

「ああああああ……畜生お前ら襲ってもいい?」

「……は?」「え?」「は?」

「犯していい?」

あれ、俺何言ってるんだ。

「……」  
「……」  
「……」

「だあーめだ、惚れたあ。お前ら大好きい」

あれ、俺何してるんだ。

「ちよっ、いきなり抱きつくな!」

「とか言ってる嬉しいだろ」

「なっ、お前何言ってる」

「あはははははっ、笑えるぜえええええい」





## 九話 のらりくらりと嘔吐き道

ふと思えば返せば、あの悪夢のような酒地獄から既に三日が経っていた。体はまだ全快とは言えないが、それなりには動くようになっていた。これから体を鍛えれば、アリスさんの言っていたように限界を伸ばせるかもしれない。そもそも人間に限界などないように。

などと下らない虚言の織物を脳内で掲げながら、お茶を啜る。この世界に来た時もこんな感じだった気がする。ただ一人役者が足りないが。そういえば紫さんとはまだ顔を合わせていない……冬眠でもしているのだろうか？ いや、ありえないか。

……何故だか本当のような気がする。

「……考え事？」

横から声。どうやら気がつかない内に目を閉じていたようで、開けると太陽の光が目に入ってきた。思わず眉を寄せながら、声の掛かった右を向く。

相変わらぬ無防備な格好で、けれど幻想郷随一の実力を誇る天才巫女の霊夢さんが、同じくお茶を啜っていた。その目には何処か遠い所を見据えているような何かがあった。何かあるのか、そんな事は知らない。

けれど この瞳を持った人間は幾度と無く見てきた。

「……考え事」

「……そう」

春も終わりに近づき、もうじき夏が来る。けれどこの場所は何の

変化もなく、ただただ在り続ける神社と化するだろう。ちらりと、流し目で霊夢さんを見据える。

どこか、無気力だった。何故か、それは分からない。ただの性格という事もあるだろう。ただの気まぐれという事もあるだろう。無限の瞳は、けれどもどこころとその性格を豹変させるものなのだ。故に 俺は何もしてあげられない。

「……暇、ね」

暇。

それだけだろうか。分からない。分からないこそ、踏み込んでもっと知ってみたい欲求が生まれるが それは即ち裏切り行為だ。嘔吐きの裏切り程滑稽なものはない。

…… 人事ではないのかもしれない。そんな事を、唐突に思ってしまった。

いつかは、俺の事を知ろうとする生物が現れるだろう。

いつかは、俺は全てを話さなければならぬ時が来るだろう。

いつかは、なんてものじゃなくて、遅かれ早かれ もうじきそれは来るはずだ。

果たして、その時俺は真実を話せるだろうか？ 信じた人間妖怪魔法使い達に、果たして俺は全てを偽り無く話す事が出来るだろうか？

けれどそれは、出来るか出来ないかの問題じゃなくて、やらなければならぬ事なのだろう。

嘔吐きの真。

いつかは 絶対にその時が来る。信じてもらえるか信じてもら

えないかは、けれどやはりそれも、信じてもらわなければならない事なのだろう。  
と、思う。

これは果たして嘔吐きの妄想か、はたまたその産物か。

「……暇、ですね」

思考を、断ち切る。俺の全てを話す時が近いだろうが、そんなのは関係無い。ただ話す時になって、俺が嘔を吐くか真を吐くかの違いだ。

そしてそれが 同時に俺が幻想郷で生きる事を決意する事なのだろう。その時初めて、俺の物語は始まるのだと思う。

しかし、『俺』……か。はっきり言って似合わないにも程がある気がする。顔も敵つくは無いし、かといって背が高い訳でもない。口調も丁寧語だし、『僕』の方が似合っているだろう。

僕……か。僕、ね。

どちらにせよ 嘔吐きに似合う一人称など無いという事か。俺はやはり俺という代名詞を使って、俺という存在をひたに隠し続けるのだろう。

正に 嘔吐き道だ。

「……霊夢さん」

「何？」

「信じてても、いいですか？」

「……馬鹿みたいね。何を今更言ってるんだか。良いに決まってるでしょ」

そう言ってお惚けたように肩を竦めて見せる霊夢さん。ああ、中々にその仕草は似合っている。けれどやはりそれまでだ。けれどやはりそれまでなのだ。結局の所　その程度でしかないのだ。

何て　何て強いんだろう。どうしてここまで強いんだろう。この世界の住人は　嘘を吐く事もせず、かといって臆病になる事もせず、人の目をしっかりと瞳と捉え、他人を労われる。

その程度。所詮、俺はその程度。逃げ道の確保しか出来ない。いつか必ず逃げ出す臆病者。嘘吐きの裏切り者という滑稽の愚者。けれどいつかは、それすら壊される。

いくら平和だろうと戦争は起き、いくら抵抗しようと無抵抗になり、いくら暴れようといつかは衰弱し、いくら直そうといつかは壊れ、いくら頑張ろうといつかは無力になり、いくら笑おうといつかは泣き、いくら生きようといつかは死んで　いくら嘘を吐こうがいつかは真を吐かされるのだ。

けれどそれが　無限という事なのだと思う。だからそれが有限じゃないという事なのだろうと思う。何もかも、この世に形を造られた物は　でもしかし有限に逆らい無限の時を生きている。

終わるものなど　この世には存在しない。それがいくら幻想郷という世界だろうと　ここが世界である限り、終わるものなど存在しないのだ。

「信じれない、嘘だ」

一人で呟いて、そらを仰ぐ。落ち始めた太陽が見えた。けれど明日、また太陽は昇る事から始めるのだろうか。ご苦労な事だ。そう

やって無限の時をいきてれば良い。どうせ 終わらない、という  
終わりなのだから。

「それじゃ、昼食作ってきますね」

振り向いた先には、眠る霊夢さんが居た。相変わらず無防備にも程がある。もしかして誘ってるのだろうかと思う事が昨日の夜あったが、本当に誘ってるんじゃないか？ いや、無いか。あつたら困る、そんな事。

あつて たまるものか。

「……意気地なし」

「言われ慣れてます」

たとえ誘われようと 俺が誘われたと感じなければそれまでだ。  
良い夢でも見て 魔される。

「んー、普通だぜ」

「そうね、普通」

「うるせ。男が料理上手いとか、そんなの妄想の産物に決まってる  
だろ。正直女も料理上手いとは思わないけど、実際上手いのは何で  
なんだろ」

「慣れだぜ」「慣れね」

「やっぱり。考えてみるよな。慣れだつたら俺が料理上手いわけねえだろ」

呟きながら、茸の入った味噌汁をかきこむ。正直、味が薄い。けれど自分が作ったものだから贅沢言わないでかきこむが、てかこれって逆の立場じゃね？ とか考える。普通は霊夢さんと魔理沙さんが遠慮するもんじゃないのかな。

とはいっても、この二人に遠慮を望む時点で間違ってる気がする。

「……アリスさんが恋しい」

今まで出会った生物の中では、多分アリスさんが一番まとまとだと思ふ。出会いこそアレだったが、普通に常識人なのだ。礼儀の正しい所は正しいし、かといって生真面目というものでもない……アリスさん誰か呼んでくれないか。

「……私じゃ不満か？」

「いや別に」

「私じゃ不満かしら？」

「いや別に」

そんな下らない応答を繰り返していると、諦めたように溜息を吐く二人が見えた。

とりあえずさっさと飯を腹にかきこむ。そういえば幻想郷にはス

ポーツが無い。野球もサッカーも無いのだ。人里では学校なるものがあるらしいが、果たしてスポーツもない幻想郷にすっかりとした学校がある事すら疑わしいのだ。

しかも情報元はあの胡散臭い千年妖怪の紫さんだ。怪しい事この上無い。とはいっても、一応命を助けてくれた恩人……だと、思う。そういえば聞いていない事がたくさんあった。

未だ不満気に飯をかきこむ二人に、話しかけようとした所。

「……いや、睨むなよ」

睨まれた。

とはいっても、ヤクザに一日中目を付けられた事があるからこんなのはどうという事も あった。やっぱり怖いもんは怖い。下手したらヤクザよりも怖いぞ。

「えーと……質問いち、何で俺の制服は直っているのか」

「それは貴方の愛しい恋しいアリスちゃんがやってくれたのよ」

どんだけ根にもつんだらう霊夢さんは。

「では質問つう、俺はどうやってここに来た？」

あ、これは。幽香さんに半殺しになってから、妙に感覚の鋭くなった本能が

「……紫さん」



「あら バレちゃった」

紫さんの来訪を告げた。

「霊夢さんはどうとでもいいような澄まし顔だ。魔理沙さんはずっと目を鋭くさせていた。」

そして背後からの声に、俺は振り向く。

「そんな威圧されると 萎縮しちゃうから止めてくださいな」

「あらあら、言っじゃないの」

「ええ、どうやら一皮剥けたようです」

「ふふ、半年寝ていた子供がよく言っわね」

「子供が故に じゃないですかね？」

「そうなの？ あんまりおいたの過ぎる子供には お仕置きっていつのは定番よねえ」

「ですね まあ、千年以上を生きる妖怪の定番っていうのは、楽しみですね」

「あら？ 期待するの？」

「ええ、勿論ですよ。きつと誰も予想だにしないお仕置きなんですし

「よっね」

「そうやって期待するのが貴方の悪い癖ね」

「そうやって期待させるのが貴女の悪い癖だ」

「……変わらないわねえ」

「変わっていて欲しかったですか？」

「ええ、そうね。幽香との鬨いで懲りてほしかったものだけど」

「嘔吐きに懲りるなんて言葉、虚言にも程があるでしょう」

「……貴方、いつか死ぬわよ？」

「それでも胸を張って後悔しないのが、嘔吐きたる所以なんですよ」

「死ぬのが、怖くないのかしら？」

「怖いに決まってるでしょう。恐れますよ。でもね、俺が死ぬ時は俺のやる事を全て終えた時なんです 故に、後悔はしない」

「……そう」

「ここで怖くないとか言うのは、ただ自分という存在を認めていない愚者でしかないですよ。悪いけど俺は、嘔吐きで十分です」

「それも十分愚者だけど？」

「そういうなら、そうなんでしょうね」

「……水みたいに、のりくらりとしているわね。どうしてそんな感じで幽香をかわさなかったのかしら？ 貴方なら戦闘を回避する事も出来たでしょう？」

「弱者を見下していたから、足元掬われないように忠告しただけですよ」

「ああ、そういえば一矢報いられたと幽香が笑ってたわね」

「足吹き飛ぶ程の爆発喰らって笑ってられるとか、幻想郷最強の妖怪は伊達じゃないですね」

「まあ、そうね」

「まったく、笑えない」

「笑ってるじゃない」

「笑えますから」

「……調子狂うわね」

「狂わせてますから」

言うてから、コップに注がれた水を飲み干して喉を潤した。

「それじゃ 俺はお手伝いに戻るとでもしましょっかね」

「……ちょっとは、自分の体を労わりなさい」

「労わってますよ 精一杯、ね」

のらりくらりと。

また今日も。

俺は嘘を吐く。

## 十話 茶番と茶番

「食べてもいいの？」

そんな事を見た目美少女に言われる今日この頃、ふと空を仰げば闇が広がっています。能力を使って毒は弾くようにしておりませんが、妖怪を避ける事は出来ないようです。そんな見た目美少女はやはり、妖怪なようです。

ここで魔理沙さんとかアリスさんとか言えばすぐに駆けつけてくれる気がするけど、それは余りにも酷すぎるので止めよう。ふむ、さてどうやってかわしたものだろうか……。

「……んー、お腹減ったぞー」

そう言ってゆらりゆらりと近づいてくる。少女の周りだけ、空間に闇があった。空を見上げてても闇。けれど、別種。纏うオーラが闇という事なんだろうか。まったく厄介な事この上無い。ていうか御使いなんて頼まれるんじゃない。

こんな事になる位だったら紫さんにも押し付ければよかったな。などと妄言の中の妄言を頭で呟きながら、踵にのっていた体重を爪先に乗せする。距離は三メートル程だ。物理的とか論理的とか、そんなこの世界では通用しない理論で考えるのなら、この少女が俺に接近するのは二歩程度だろう。が、常識などという理論が当てはまる世界ならば、ここが幻想郷なわけがない。

刹那だろう。文字通り、この少女が本気を出して俺を殺そうとすれば、俺は刹那で弾け飛ぶ。

爪先に力を込め、いつでも避けられるようにしたとしてもそれは同じ。まったく、嫌な世界だ。幸福など感じない、嫌な世界。

まあ、元より。

俺が幸せになどなっちゃいけないのだろうが。

「……食べてもいい人類なのか？」

っと、無視しすぎたか。闇が広がった。本気でここは叫ぶべきだろうか？ 魔理沙さんとかアリスさんって。確か魔理沙さんはスピードには自信があるとか言ってたから、すぐに駆けつけてくれるだろう。

アリスさんの場合はあの人形が聞きつけてくれるんじゃないだろうか。いや、さすがにそこまで親しくはないから……ううん、分かん。

「……ま、そうだなあ」

ふと、呟く。

「俺を食べたら、死ぬ覚悟はしておいた方がいい」

「ん？ どーしてだ？」

「食べられたら幸せの余り死にそうだから　ね。俺が幸せになった瞬間、お前は死ぬ。だから、食べるのは止めておいた方がいいと思う。でももしもお前が俺を食べると言うのなら、俺はなるべく幸せにならないよう頑張るから　貪ってもいい。内臓でもぶちまけて、血肉を嚼つて、泥のような脳味噌を食い散らかし、あたり一面を赤色に染めたって　構わない」

「んー、そーなのか？」

「ああ、ちなみに俺の血は残念ながら美味しくないと思う。一度手首を切ってみた事があるが、まるで美味しそうじゃなかった。まあ人間がそう感じるだけだから妖怪のお前は美味しいと、あるいは感じるかもな。で　まあ、お前に一応アドバイスしておくけど」

「なんだ？」

「人を食うときは　背後から迫る事をオススメする。そうじゃないと死んじまう。いつ　足元掬われるか分からないから、な」

俺らしくない言葉だった。偉そうな言葉だった。けれどこの少女にはこういう口調が合っているのだろうと思う。それは偏見だろう。見ただけで分かる程の妖怪だ。だからきつと偏見だ。でも言う。だから言う。言わないと俺は廃る。

これはきつと　俺が幸せになってきた証なんだろう。もうじき、俺は完全に幸せという感情を解凍するだろう。

その時が　俺の死ぬ時。

「んー……ところで食べてもいいのか？」

「……そうだなあ、こうなる事は何となく分かってたけどなあ」

……やっぱ子供だもんなあ。いや、大人なのかもしれないけど、俺から見れば子供だしなあ。

ここはやっぱり呼ぶしかないか。

大声は嫌いなんだけど……ああ、声を変化させて魔理沙さんとア

リスさんに届ければいいのか。まあ疲れる事は承知だけど。

「　　っ、ナイスなタイミングな事で」

ふと遠く先の方に見えた何か。

一人の人間と　その周りを飛ぶ何か。

アリスさんだろう。

「で……お前の名前を聞いてもいいか？」

「ルーミアだぞー」

「ルーミアか」

「お前はー？」

「知らない」

爪先に乗せていた力を爆発させ　砂を蹴り上げる。背の小さなルーミアさんの顔に直撃した砂は、きつと三秒程の硬直を強いるだろう。その間に一步後退し、瞬間ルーミアさんの脇をすり抜けるように駆けた。闇を突っ切るのは中々勇気が必要だったが、まあ大丈夫だった。

そしてこちらに気づいたアリスさん、やっぱりアリスさんだったか。とか確信めいていた事を何となく心で呟きながら、手を振る。

「あれー？」

「ルーミアさん、それじゃ、また会いましょう。という事でアリスさん先頭で逃げましょうか、はいレッツゴー」



「え、ちょっと」「早く早く早く！ 夜の森なんて怖くてやっつらんないんですよ！」

とか言ってみたらアリスさんはノリが良いようで、ちゃんと走ってくれた。途中で色々な妖怪に出会ったけどとりあえずスルー。ちょっと速度を落して、アリスさんと並んで駆ける。

そして初めて見るアリスさんの家らしく所に着いた。

「……そして魔理沙さんが居るのはもはやお約束な展開ですね」

「本当ね、呆れるわ」

とか溜息を吐きながらアリスさんは答える。

「何だよ、私の扱いが結構雑になってきたぜ？」

「それが普通なんですよ」

「それが定着したのよ」

「……泣いちゃうぜ」

「泣いて喚いて醜態さらせばいいんですよ」

「そうね、それも中々面白そうだわ」

「……うっ」

「嫌嘘ですけど本当、俺がそんな事心から思うわけないじゃないで

すか。ちょっと昔の仕返しをしようかなーとか何とか考えて口から出た舌先八丁の嘘ですから安心してくださいよ本当、ね、アリスさん」

「そうよ心の中じゃアンタの事大切に思ってるのよだから大丈夫よ安心してなさい。私が心からそんな事思わないじゃないの本当」

「……もういい、帰る」

「いやマジで嘘ですからねガチで！ 大好きな人にそんな事言う奴なんて居る訳ないじゃないですか！」

「そう嘘！ 嘘だからね魔理沙！ 大好きな……っで、え？」

「……本当か？」

「いや、二人とも迫らないでください。あくまで人としてですから」

とかいいながら、何て茶番なんだろうと内心溜息を吐いてみた。どれもこれも何もかもが茶番。茶番。本当に どれだけ俺は幸せになりそうなんだろう。どれだけ俺は死にたがりなんだろう。

「ちっ」「それならいいの」

そんな声。

だから だからただ俺を幸せ者にしたいんだこの二人は。

本当に 俺を殺したい自殺志願者だ。この二人も、どいつもこいつもあいつもそいつも。

「ところで 貴方、かなり身体能力向上したわね。正直驚いたわ」

「……ええ、まあ。割とガチで鍛え始めましたからね。もう夏に突入しましたし 平和ボケしそうなんで、ね」

「ん？ 何かあったのか？」

「ちょっとばかしルーミアさんから逃げてきたんです」

「……へえ、息一つ乱れてないな」

「茶番でしたからね」

マジで食われそうだったけど。

というか、結構疲れてるけど。

「茶番……ね。そんな事言える外来人は貴方だけね」

「だって俺ですから」

「まあお前だからな」

「……一つ、割と真面目に聞いてもいいですか？」

きつと、俺はこの時。

幸せになりそうだったんだろーつと思っ。

そういう 設定で、俺は言っ。

質問を。

疑問を。

茶番を。

投げかける。

「もし 俺が自殺したらどうしますっ？」

何て。

何て。

下らない質問だろう。

「ぶつとばすぜ」

「魔理沙と同じだわ」

ああ。

本当に。

俺の死期は、近いようだ。

「幸せ者は、早く死ぬってね」

誰にも聴こえない程度に。

だからそれは心かもしれないけど。

眩  
い  
て  
み  
た。  
。

## 十話 茶番と茶番（後書き）

伏線をかなり押しつめ、異変の時に回収する予定ですので、読み込んでおいて損はないでしょう。感想欄が大分寒いので、是非感想ください。

十一話 嘔吐きの死に場所（前書き）

さて第一部完結に突っ走ろうぜ！

## 十一話 嘔吐きの死に場所

月並みな言葉で言うなら、紅い霧が空中で漂っていた。と、そんな言葉は月並みではないんじゃないかと思いつながら、魔理沙さんにしがみつく。二度目だが空を飛ぶというのは慣れるもんじゃない、平常な精神なんてしてられないはずなのだが、こんな紅い霧が空中を覆って太陽光を遮っている時点で本来ならば平常な精神なんてしてられないのだ。

本来なら見えるはずの青空も無ければ、そこに浮かぶはずの白い船も無い。そして眩いばかりで、今の時期である夏には欠かせないはずの太陽さえも無い。

「……異変、ねえ」

…… 霊夢さんと魔理沙さんの言葉を借りるなら 異変。中々あるものじゃないらしいが、しかしあるのも事実で。まあ大体が気分で行われるらしい。しかしながら、ただの気分という言葉で空を紅色に覆ってしまう事自体がおかしいんじゃないだろうかと思う。

けれどおかしくなければ、それは幻想郷じゃないんだろ。普段ならありえない事、そもそも存在自体がおかしい俺が言うもんじゃないんだろうけど。

存在してなど、駄目なはずな俺が言うもんじゃないんだろうけど。

「……あー、あれですか？ 異変の元凶って」

「あ、そうだけ。紅魔館って言って、吸血鬼が居るんだぜ。まあ私はその図書館の方にも行ってるとだけだな」



ふわっと、魔理沙さんが言い切ると同時に体が落下を始める。思わず叫びそうになったが上から魔理沙さんに掴まれて、難なく着地。久しぶりの地面な気がする。

正面を見ると 凄まじい屋敷があった。何が凄まじいかと聞かれれば、その豪華さに目を見張ってしまふ。まったく、外の世界じゃこんな屋敷普通は無いぞ。どんだけ金持ちなんだよ。吸血鬼っていうからもうちょっとしんみりしているかと思っただが、ていうか館という文字が付く時点でおかしい。

家じゃないだろ……。

「……何呆けてんのよ、行くわよ」

ほんと肩を叩かれ振り向くと、霊夢さんとアリスさんが居た。霊夢さんは普通に異変解決には乗り出しているらしいが、アリスさんは珍しいらしい。理由は図書館に行って人形の知識などについて知りたいとの事。

……そんな気軽に付いてこれるほど、簡単な異変なんだろうか。ふと、そんな事を思ってしまう。

何かが 違う。

紅い霧を噴出する館に混じる 獣の気配。一種の化け物的な、何かが蠢いている感じ。ごくりと唾を飲み込む。そこで初めて気が付いたが、何だか中国人のような女性が門の近くに居た。じつとこちらを見据えているその目は どこか眠そうな感じだった。門番という、ポディションなのだろうか？ とてもそうは思えない。

とりあえず魔理沙さんと霊夢さんが先導し、俺とアリスさんがその後ろで付いていく。紅い霧に混じった何かが 一層濃くなった。思わず立ち止まりそうになる足を無理やり動かす。

死ぬのは怖いが。

「ここが俺の墓標になるのは間違いないのだ。  
死に場所。何度聞いても吐き気が出てくる言葉だ。」

「異変解決に来たんですか？」

ぴたりと、二人の足が止まる。同時に俺とアリスさんの足も止まった。目の前の女性が、するりと目を細めたのが分かる。けれど殺気は感じない。

だからきつと、これも結局はお遊びなんだろう。決して人は死ぬ事のない お遊び。暇を持て余した吸血鬼が気まぐれに行く、そんなお遊び。

まあ だからといって何も無いのだけれど。

「ええ、だから通してくれないかしら？ 無駄に力は消費したくないのよ」

「言いますね。そう簡単には 通しませんよ？」

そう言っただけで女性はずりりとカードを取り出した。アレは スペルカードと呼ばれる物だったはずだ。霊力を込めれば入力されていた現象が起きるカードと言う、分かりにくい説明をされたが、つまりはメモリーカードなのだろう。

けれど、ここから始まるのは

「弾幕ごっこで、勝負です！」

弾幕、ごっこ。

「それなら私が行くぜ！」

「っ、貴方ですか！」

死ぬ事はない。

そんな お遊び。そこに漂うのは殺気でも何でもない、ただのお遊びの気配。けれど この気配を感じれば尚更分かる。

何かが、この館で、蠢いている。怪物か、化け物か、はたまた魑魅魍魎の類だろうか。館の主だろうか？ けれどももしもこの気配が主だと言うのなら 紅い霧を猛毒なりにするだろう。それをしないという事は そういう事。

何となく。

といった感じで。

狂気を俺にだけ見えるように、変換した。

瞬間 それは地下から溢れでていた。黒い 凶器。暗黒という言葉が合っている。地下室だろうか、そこから溢れ出ている。

思わず背筋が震えた。凄まじい狂気なのだど認識する。俺の中の呪いという狂気ですら霞んで見えなくなる程の狂気。瞬間、二度目の理解をする。

一度は外れた予測をする。

きつと、今日俺は死ぬ。

「……ちよつと、大丈夫？」

ふと声が掛かった。はつと気が付くと、既に勝負は付いていたようだ。無傷の魔理沙さんと、倒れ伏す門番の人。けれど女性はむくりと起き上がると、欠伸をした。

のびのびと、羨ましくなる程のマイペースさだった。

「じゃ、通させてもらっぜ？」

「ええ、どうぞ。負けたものは負けたので……ん、貴方もしかして外人ですか？」

素通りしようとした足を、止める。

「……はい、まあ。普通の外人です」

「あー、じゃあ忠告しておきますけど、今この中は危ないので待っている事をオススメしますよ？」

「まあ、死なないので大丈夫ですよ」

「まあ霊夢さんと魔理沙さんが居ますからねー」

「そういう事です。余計な事さえしなければ、無事に生きれると思うので　大丈夫ですよ」

「……一応、気をつけてくださいね？　ちなみに申し送れましたが紅美鈴と言います」

「美鈴さんですか、よろしくお願いします。ちなみに自分、名前が無いもので。大変失礼ですが名乗れません」

「あつ、そうなんですか、すみません」

「いえいえ」

朗らかな笑みを浮かべる美鈴さんに一礼し、そのまま前に進んで

いく。門の前で待っていた三人に手をあげて一応謝る素振りを見せてから、門を抜けた。

紅かった。さすが吸血鬼の館と言うべきか、まったく血のよ  
うに紅い。かといってセンスは有るらしく、それなりに綺麗で格好  
良かった。

けれど 黒さがある。

やっぺられない、黒さだ。

襲い掛かってくる小さな生物……妖精の攻撃を適当に受け流した  
り、助けられたりしながら道を進んでいくと 目の前に女性が立  
っていた。

少女と言うべきだろうか。メイド服。魔理沙さんの服をエプロン  
的なメイド服というのなら、目の前に立つ少女の服は完璧なメイド  
服だった。しかも着ている人が気品に溢れているというのだから  
まったく侮れない。

「美鈴は簡単に通したようね……はあ、本当に面倒」

「……咲夜か」

「じゃあ、次は私がやるわ。魔理沙はアリスと嘔吐きを守ってなさ  
い」

「嘔吐きかよ」

「嘔吐きじゃない」

「嘔吐きだけだよ」

「ならいいでしょ」

「まあな」

「……やるなら早くしてくれない？ 悪いけど負ける気はないわよ」

「あら、何回も負けてるメイド長が言うじゃない」

「行くッ」

そこまで聞いてから、視線を逸らす。どうせここから始まるお遊びは、その次元を超えているお遊びと言えないものなんだから、見ているも仕方が無い。こちらに被害が及ぶことは魔理沙さんが居るから問題無いだろう。

ヒートアップしているであろうバトルと比例するように、今にも飛び出してきたきそうな狂気が地下から溢れ出ていた。何だかとても嫌な予感がする。こういう時に限って予感は当たるのだから手におけないものだ。

死にたく、無いんだけどなあ。

死ぬしか、無いよな。

悪いけど、俺のせいで誰かが死ぬなんてのは 勘弁してもらいたい。だから、俺は死ぬしかないだろう。死ぬしか、無い。

けれど死にたくないという理性が本能に移り変わり、自殺すらも出来ないんだからタチが悪すぎる。死ななければならぬのに、死にたくないという 究極すぎるジレンマだ。

そしてそのまましばらく、ぼうつとしていると勝負があったようだった。そこにはメイドの人が若干血を流しながら肩膝を付いてお

り、服を少し汚した霊夢さんがふうと息を吐いていた。

更にナイフがそこらじゅうに散らばっていた。霊夢さんはナイフなんて使う訳ないし、それはメイドの人の武器だろうか。まったく恐ろしい事この上無い。しかしナイフで闘ったら殺してしまう可能性があるんじゃないだろうか。

いや、そこはさすが幻想郷というべきか。

「さ、それじゃ異変の主に会わせなさい」

「……はああ。仕方無い、か」

ぱっぱと慣れた手つきでメイド服の汚れを払い、メイドの人は歩き出す。

「……何か、私がここに来た意味あるのかしら」

横でアリスさんが呟いていた。

「ありますよ。俺にとっちゃ、安心感を増大させる一人ですからね」

「そう言ってくれると嬉しいわ」

「そいつはどうも」

「……意地悪ね」

「嘔吐きですからね」

「本当、何でそんな無表情で嘔吐けるのか私には理解出来ないわ」

「理解出来たら晴れて嘔吐きです。同属ですね宜しくお願いします」

「何よその嫌な属性」

「属性です」

「……調子狂うわ」

「はっはっは、デジャヴですね」

「何よそれ」

「運命の廻り合わせですよ」

「そう言っって誤魔化すな」

「じゃあどうやって誤魔化すんですか？」

「知らないわよー！」

「怒鳴らないでくださいよ、場を考えましょう」

「何よ場って」

「ここは晴れて嘔吐きの死に場所ですよ」

「嫌な嘘ね」



「まあ、嘘ですから」

そんな嘘を吐いた。

それから数分して、メイドの人が足を止めた。一層大きな扉。  
きつとこの先にこの館の主が居るのだろうか 俺はその人に会  
いに来たわけじゃないのだ。

そう、これは運命の廻り合わせだ。

## 十二話 嘔吐きの嘘はただ回る

目の前の少女はレミリア・スカーレットと名乗るらしいが、しかし俺としては別にそんな事どうでも良くて、ただ地下から溢れ出てきている狂気に飲み込まれないように気をつける事しか出来ない。

青というよりも蒼色の髪と、吸血鬼のごとく紅い瞳。

そして少女は霊夢さんと魔理沙さんを懲らしめるらしく、弾幕勝負を持ちかけていた。そこにアリスさんも入り、実質的に三対一の勝負。霊夢さんや魔理沙さんの強さは知っているから、きっとこの勝負は圧勝で終わるだろう。

目の前で始まる弾幕勝負を見る事なく、俺は反転して部屋から出た。この館に来た時から影が薄くなり、ついには空気となった俺が抜け出したとしても誰も気がつかないだろう。

それでいい。それで物語は続く。俺が居なくなっても、物語は続くのだ。ただひたすらに紅い廊下を歩き、妖精メイド達を掻い潜りながら地下を目指して歩いていると、気がついたらそこにメイドの人が居た。

「……どこに向かうおつもりですか？」

「地下室」

嘘を吐く必要は無い。

「……どういっ、おつもりでしょうか？」

「あっ、そこですか。どうして知ってるのか聞くべきだと思うんですけど」

「話を逸らさないください。場合によっては」

きらりと、ナイフが輝く。

まるで手品のようにメイドの人はその手からナイフを出現させたのだ。まったく、驚きどころだ。

「まあ、俺を殺したとしても物語は終わらないのでしょうけどね」

「……訳が分かりません」

「そういう人種なんです。現に貴方だって、俺の存在をまるで気にしていなかったじゃないですか。俺が居なくても物語は進むって、そういう事ですよ。いわゆる名の無いモブキャラみたいなもんですね。有り触れた極々普通の居ても居なくても同じな存在。ていうか良いんですか？ 館の主人が霊夢さんとかにボロ負けしちゃうかもしれませんよ？ てか俺を殺したら 貴方も死ぬ事になりますけどね」

「……お嬢様の能力をお忘れですか？」

「えーと？ 何でしたっけか」

「『運命を操る程度の能力』……それが、お嬢様のお力です。ですのでお嬢様が負ける事はまず無いかと」

運命、ね。

これは中々どうして、面白い能力じゃないか。

予定変更。歩いてきた足を止めて、くるりと身を翻す。遅れて後ろからメイドの人がついてきているのが分かる。

「もう戦いも終わるでしょうから、ちょっとくらそのレミリアさんだかに会って話をしますよ」

「っ、貴方は一体何がしたいんですか」

「しいて言えば、何かをしたいんです」

「答になっていません！」

すつと、首筋に何かが当たった。足を止める。らしくない激情だ。そういえばこの人からは、妖怪らしさというものが感じられない所から見ると、人間なのだろう。

人間が故に 心配してくれているという所だろうか。これで外していたら悶絶して恥ずかしがる。穴掘って入ってみよう。ああ、本当に。

幸せ者は、困るなあ。

「まあ そのナイフをどけてください」

「……貴方みたいな外来人は初めてよ、本当に 信じれない」

「おつと口調を崩してくれたみたいでありがたい。さあてそれじゃあレミリアさんにご挨拶とでも行きましようかね」

のらりとそう言って、歩き出す。ナイフは首筋を擦り、気がつけば血が首を這っていた。首の熱さでそれが分かる。でもまあ皮一枚程度だからどうって事は無いだろう。そういえばレミリアさんは吸血鬼なんだから、血でも飲んでみようか。

おつとワクワクしてきたな。これは中々。

そして元の部屋の前に戻ると、既に勝負は終わっていて話をして  
いるのが見えた。三人とも服が破れていたりするだけで、目立った  
外傷はなく、レミリアさんは敗者に相応しい格好をしていた。

これで大人の女性だったら興奮どころだろうなあ。なんて考えな  
がら部屋に入る。視線が集中した。

「お前どこ行ってたんだ？」

「いや、地下室行こうと思ったたらメイドの人に会って、レミリアさ  
んの『運命を操る程度の能力』だかに興味を持ってさ」

言った瞬間 凄まじい殺気が俺目掛けて放たれた。ちらりと視  
線を向けると、レミリアさんが激昂の表情をして俺を見据えている。

だから 体ごとレミリアさんに向けて目をじっと見る。その後  
どの位の時間が経ったか、誰も言葉を発しなかったし、誰も息をし  
ていないような気さえした。何だか 馬鹿らしいとしか思えない。  
というか何でこんな幼稚にガン付けなどしなくてはいけないのか。

「阿呆らしい」

呟くと、更に殺気が強くなる。

「これが館の主人か……がっかり」

びたりと、首筋に何か当てられる。ナイフだろう。血の出  
ている箇所当てられているんだからメイドの人か。というかナイ  
フといったらメイドの人だよな。

まったく 過保護なもんだ。

「容赦はしませんよ」

「口調が戻りましたね」

ぐつと強くナイフが当てられる。同時に魔理沙さんが箒を手にし、  
霊夢さんが札を取り出し、アリスさんが弾を作り始める。過保護と  
いう点では同じなのかもしれない。

「で レミリアさん」

「貴方に名前を呼ばれる筋合いは無いわよ」

「地下室に俺を連れて行ってくださいよ」

「っ、お前なんで知ってるんだ！」

背後からの魔理沙さんの声。応じる事はしなかった。  
ただ、ゆつくりと手を上げる。

「地下の狂気が 暴発寸前だ。このまま行けば狂気を持った生物  
が暴走して、大変な事になるかもしれない。そして、多分だけど  
俺はそこに行かなきゃならない」

多分。

そして俺はそこで死ななければならぬ。

誰も殺さない為。

誰かの幸せを奪わない為。

「だから 連れて行ってくれよ」

すつと。

最初から無かったかのように殺気が消えた。レミリアさんの目から怒りの色が消える。

まったく何だったんだあの茶番は。

本当に笑える。

「……いいわ。咲夜」

首筋の圧迫感が消えた。

「その代わりに、貴方がどうやってフランを助けるのか見させてもらおうわ」

「ちよ、待ちなさいレミリア！ この人は唯の人間なのよ！」

「そつだぜ！ 絶対行かせないからなッ！」

物事を進む上で障害が出るのは当たり前か。

障害が厄介なのは、その障害に対して情を持っているから厄介なんだ。だから、情を捨てればいい。俺は何も知らなければ、何も感じない冷酷無比の男だ。だから だからこそ、この時ばかりは嘘を吐け。

精一杯の、嘘を吐け。

「邪魔だ、どけ」

空気が凍った。  
誰も予想していなかったか。  
そんなのは当たり前だ。

「な、何言って」

「邪魔だっけ言ってるんだよ　お前ら、俺の前から消えろ」

胸に　圧迫感。

ここまで情を、移していたのか。

嘔吐きたるものが　失態もいい所だ。

「消えろって言うてんだよ　さっさと消えろおッ！」

目を見開いて、口を大きく開けて、顔を紅潮させ　ちやんと言  
えただろうか。

意識して怒る事ほど難しいものはない。  
まったく　嫌われ者は、苦労しない。

「　嘔吐くな」



ふわりと、体が包まれた。

「私は一度お前の嘘を見抜いてるんだぜ？  
効くかよ、そんな嘘」

立場が、逆じゃないか。

「あら魔理沙。それは私も同じよ？」

暖かさが 増した。

「私もよ」

更に 増した。

本当に、何だというのだこの三人は。

本当に、何だというのだこの優しさは。何だというのだこの暖かさは。

止めて欲しい。

俺は別にそんなもの望んじゃいない。

幸せに なっちまう。

幸せに なっちまうッ！

もう 畜生。

「レミリアさん、連れて行ってください」

「……付いて来なさい」

始まるのは、一世一代の大勝負だ。

視界の端でレミリアさんと咲夜さんが扉を出ようとする。その瞬間。

包まれていた体を強引に振り払い、驚いて声を上げる三人を尻目にレミリアさんと咲夜さんの間に割って入り。そのまま強引に後ろへ追いやった。

そして 空気を軽めの壁に変える。脆く、少しばかりの衝撃で壊れる壁に。勿論、そんな簡単な物にリスクは無い。

「この壁に触ったら、俺は死ぬ」

唯の嘘。

吐きなれた嘘。

後ろを振り返りながら、そんな事を言う。  
同時に近くのレミリアさんと咲夜さんが驚愕した。

「多分　もう、地下室は壊されただろう」

感じる圧力が　近づいてきている。

「だから　俺を助けるつもりで壁は壊さないでください。その膜  
は俺の命なんです」

時間が止まった気がした。

狂気の渦が近づいてきている。

どくりと心臓が鳴る。

レミリアさん達に背を向けた。

長い廊下を見据える。

瞬間、幼い吸血鬼が遠くに見えた。

嘘吐きの 終わりで始まる物語。

これは一世一代の大勝負。

負ければ全滅。

勝てば 一人を残してみんなハッピー。

ハッピーエンドにする為に モブキャラである俺は、死ぬ事にしよう。

十三話 ただ、言う。淡々と、言う。

果たして、俺の全身は一体どうなっているのだろうか。ふと、まどろみに消えかかっている赤い視界の中でそんな事を考えた。この赤は 血の紅だ。まったくどうして、こつも俺は不幸で幸せなのだろうか。

死にそうであるというのに 死を望んでいるが故、嬉しい。そんな感情が、そんな場違いにも程がある阿呆らしい愚かな感情が湧き上がって仕方が無い。そして視界の中には幼い少女の吸血鬼が、その金髪を瞳と同じ血色に染めてこちらを見ていた。その目は興味や関心といったものが既に薄れている。

そういえば、壊れないでねとか言ってたような気がする。そんな事を思い出して、ぼうつとしてるとぐちゃぐちゃとした粘液の混ざるような音が聞こえてきた。内臓が掻き回されているのだろうか。そんな事、確認できない体じゃ分からない。

でも確かに分かるのは この幼い吸血鬼は俺と同じだという事。無茶苦茶に我武者羅に壊されて壊されて一方的なまでに圧倒されてそして俺の存在そのものを有耶無耶に変えられてしまうような今の真つ只中、けれどこの吸血鬼が俺と同属である事は間違いないだろう。

狂気に隠れたそのナニか。

それがとても俺に似ているのだ。これは推測の域を出ない、推理とも言えない様な憶測だが この吸血鬼が現れたであろう地下室に、この吸血鬼自体が監禁されていたんだろう。理由としては、多分この狂気だ。このおぞましくも凄まじい、魅力的な狂気によって少女は恐れられ監禁されていた。

まったくどうして、ここまで俺とソックリなのか。

そして親しい人間である者にしかそれを知らせておらず　とい  
うか、強い者でしか知る事は出来ないのだろう。弱ければ　殺さ  
れる。そういう事、つまりはもうそういう事でしかありえない。

館の主人である少女が、妹であるこの吸血鬼を愛するあまり  
結果としては残酷な結末を迎えた。俺の目の前で俺の体を壊滅へと  
追いやっているこの少女の狂気を沈める為に　レミアさんは、  
けれどマイナスの方向にしか進まない事やってしまった。  
手遅れ。

つまり、簡潔に言うのなら　狂気が妹のマイナスに働く事を恐  
れた姉が、妹を監禁。監禁によって生物と関わる事が極端に少なくな  
った妹の狂気は更に激しくなる。その狂気を沈める為には何かで  
発散させなくてはならない。姉は妹を思う余り、たくさんの生物を  
妹に壊させた。その中で生き残った強者は定期的に狂気を沈める為  
の道具となり、妹の存在を知る。

つまり、簡潔に言うのなら

「……………救え、ねえ」

愚かだ。

「……………最初からだ」

最初から。

「……………これが嘔吐きの、最後の、仕事か」

血が、口から漏れた。筋肉繊維を引き裂かれた腹筋を気力で持ち

上げる。幼い吸血鬼の目に光が宿った。けれどそれは残酷なまでに紅い。狂気に満ちた光の瞳。

口の端から血がだらだらと流れ、顎から地面へ落ちていくのが分かる。上半身だけを起こして、両の足首が無茶苦茶な方向に曲げられているのに気がついた。なるほど、痛覚が消えるはずだ。こんな馬鹿げた怪我、一体誰が予想するのか。

「まだ、遊べるの？」

生きている事に不思議を感じていると、俺が起き上がった事を不思議に思っているであろう吸血鬼が、無邪気に首を傾げてそんな事を聞いてきた。

「こんな事してなきゃ、本当に可愛いんだけどなあ。」

「……………ちよつと、待ってる」

時間が欲しい。今は聞かなければならない時だ。首を横に曲げる。透明な薄い壁を通して見えるのは、眉を寄せて苦悩の表情を見せているレミリアさんが居た。その視線は幼き吸血鬼に向けられている。そこから考えるに、この人は妹の狂気が治まらない事を苦悩しているようだ。

その横ではメイドの人が下唇を噛んで、何かを耐えている。無力さだろう。きつと、何も出来ない無力さが歯がゆいんだ。そこから血がつうつと流れているのを見るに、悔しいのか。

「まだ？」

「待ってる」

若干不機嫌そうに聞いてくる吸血鬼に、視線を向けずそう告げる。

後もつて一分か。三十秒と考えるのが妥当だろうか。

ふと奥に見えるのは何とかしてでも俺を助けようとしている三人の姿だった。アリスさんの肩にはいつの間にか人形が乗っている。まったく笑える話だ。こんな壁などすぐ壊れるというのに。壊れても俺は死なないというのに。

「……レミリア、さん」

肺がずきずきと痛むのを我慢しながら、聞こえるであろう限界の  
声で言う。

レミリアさんの視線がこちらへ向いた。弱者に向ける見下した視線に戻っている。

「レミリア、さん」

「……何かしら？」

威風堂々。

そんな態度されたら キレちまいそうだ。多分、死ぬ前という事もあつてピリピリしている俺が居るんだろう。落ち着け、キレても何にもならない。

それに 今怒っても結果は変わらない。

「どんな運命、見えます、か？」

「貴方が死ぬ運命よ」

一秒の間も無い即答。死ぬ運命か 当たっている。

結果は まるで文句の付け様がない大当たりだ。

きつと俺は 情けなく死ぬだろうから。



「そう、それが 運命、ですね」

「ええ、そうよ」

「じゃあ、その過程は、分かりますか？」

悪いが、俺はただ死ぬ程甘くはない。

悪いが、俺はただ死ぬ程優しくない。

悪いが、俺はただ死ぬ程苦しくない。

悪いが、俺はただ死ぬ程 真つ当な人生歩んでないんだ。

「レミリア・スカーレット。その目に焼き付けておけ。俺がどのようにして死んでいくのか。その耳に刻み付けておけ。俺が何を喋って死んでいくのか。その全身で感じておけ。俺が 一体どうやって人を助けるのか」

ただ、言う。

淡々と、言う。

「あんまり俺を 怒らせるんじゃないぞ？」

ただ、言う。  
怒ってなどいないのに。  
淡々と、言う。

「俺の名前は嘔吐きだ。脳味噌の中に詰め込んでおけ。これから吸血鬼を救う人間の名前だ」

ただ、言う。  
ただ、言う。  
ただ、ただ、言葉の羅列を、喉から発する。

血色に染まった視界の中で、レミリアさんが微笑むのが見えた。  
まったく、吸血鬼など笑わせる。

女神の、笑みだ。

残酷な女神の、死に逝く者へ向けた最高の賛辞だ。  
だから俺も、にやりと笑って見せた。口の端を精一杯吊り上げて、笑って魅せた。

魅せてもらったんだから魅せてやらないと、悪いだろ。

「嘔吐きの終わりを、始めようぜ」

「またすぐに壊れたら やだよ」

何、安心してかまわない。  
俺は期待を裏切らない。

「ゲームを、しよう」

「弾幕ごっこ?」

「いいや。違つた」

「じゃあ 何? 楽しくないとやだよ?」

「俺が今からお話をしてやるから、お前はその話が終わるまでに俺を降参させれば勝ち。俺が最後までお話を終えたら、俺の勝ちだ。」

お前が勝つたら、俺をどうしても構わない。 俺が勝つた

ら、俺を殺せ」

運命は変わらない。

どちらにせよ俺は死ぬ。

けれど結果は大事じゃない。

過程が大事なんだ。

どうやって死んだかで 俺の死に様は、苦痛の表情が幸せの表情かに、変わるんだ。

「え……お兄さんが勝つたら、フランが殺すの?」

「そうだ。だから、お前が勝てばいい。そうしたら自由、なんだから。まあ、お話を聞きたいなら　そのままでもいいんじゃないかな？」

これは誘導だ。

大人気ない誘導。

子供に対してはえげつない　汚い餓鬼のやる誘導。

「んー、じゃあ、いいよ。フランはお話を聞いて　お兄さんを殺すから」

そう。

そうなる。

そういう誘導だ。

「じゃあ、始めようか」

終わりを。  
始めよう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6837y/>

---

東方娛樂記

2011年12月1日23時54分発行